

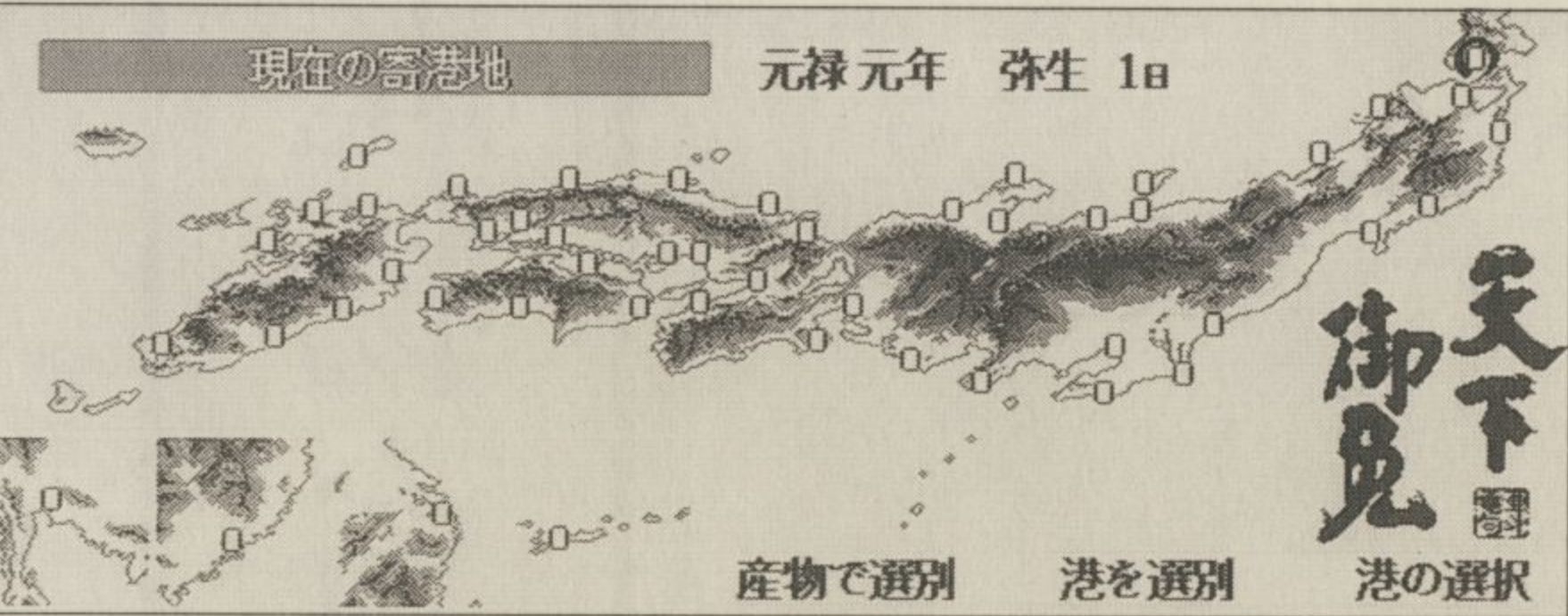
天下御免設定資料集

御国別特産物台帳

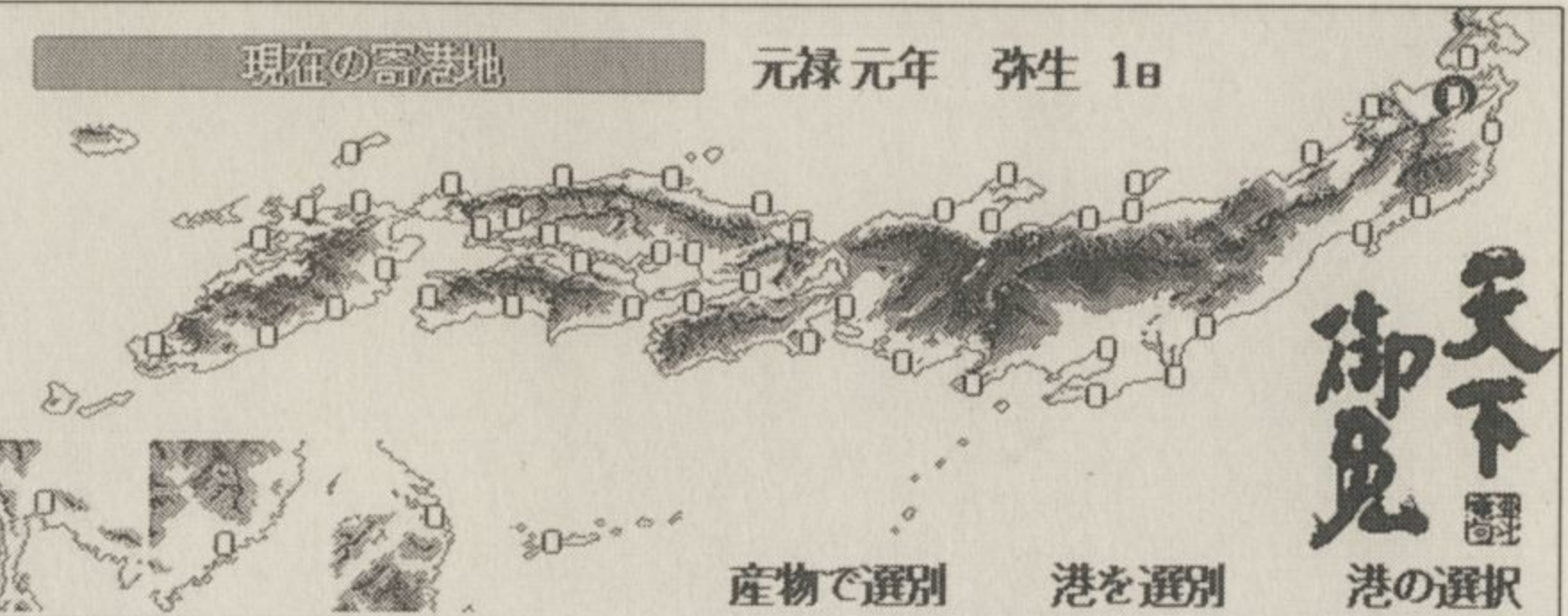
全国・港一覧（初期状態）

港の名前：所属
江戸までの片道航海日数
寄港商人：問屋種別
産物：現在の在庫量／一日の生産量

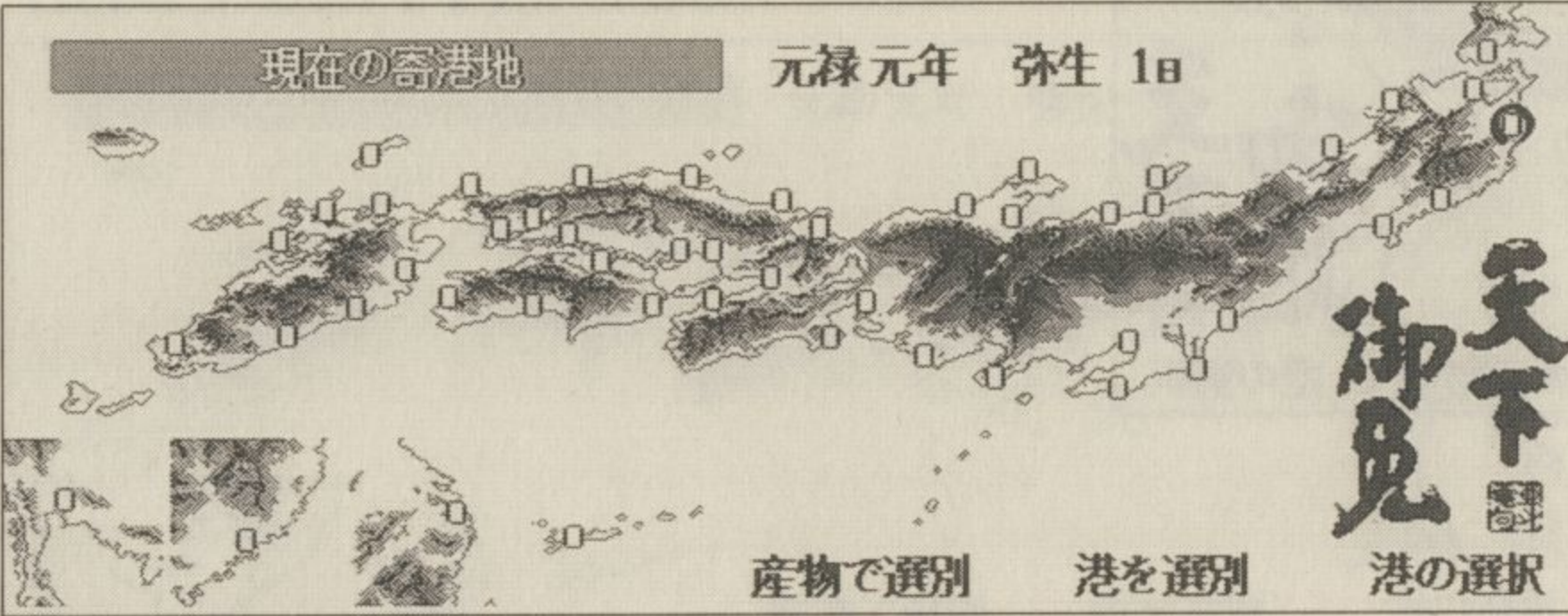
松前：松前藩
56日
三河屋吉兵衛：海産物問屋
こんぶ：32440／640
ひもの：41150／1450
塩鮭：99500／0



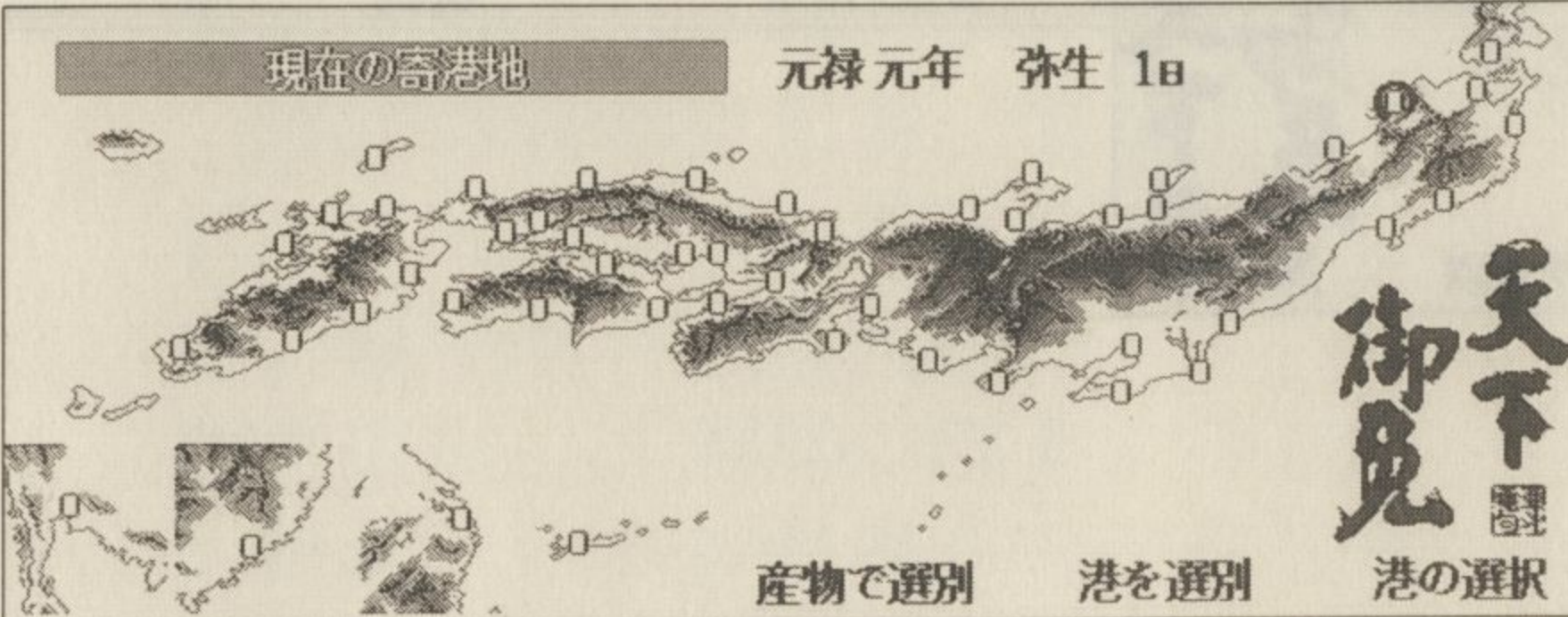
青森：弘前藩
57日
三河屋吉兵衛：海産物問屋
三島屋矢吉：染物問屋
備前屋冬吉：材木問屋
こんぶ：40550／800
塩鮭：99300／0
焼酎：16200／480
漆：71835／1650
杉材：5151／119
檜材：5557／155



八戸：八戸藩
50日
泉屋勘次：海産物問屋
春木屋幸吉：油問屋
富士屋伊之吉：染物問屋
紀伊国屋文左右衛門：材木問屋
ひもの：41250／1500
塩鮭：99400／0
炭：8675／200
紫根：12255／340
杉材：5164／112
檜材：6149／181



能代：秋田藩
65日
伊勢屋伝衛門：海産物問屋
多田屋市左衛門：酒問屋
奈良屋茂左衛門：材木問屋
こんぶ：48680／960
清酒：15890／180
焼酎：15750／440
杉材：50227／1212
檜材：59452／1484
雑材：25856／859



酒田：庄内藩

74日

泉屋勘次：海産物問屋

稲葉屋時兵衛：油問屋

梅田屋源蔵：染物問屋

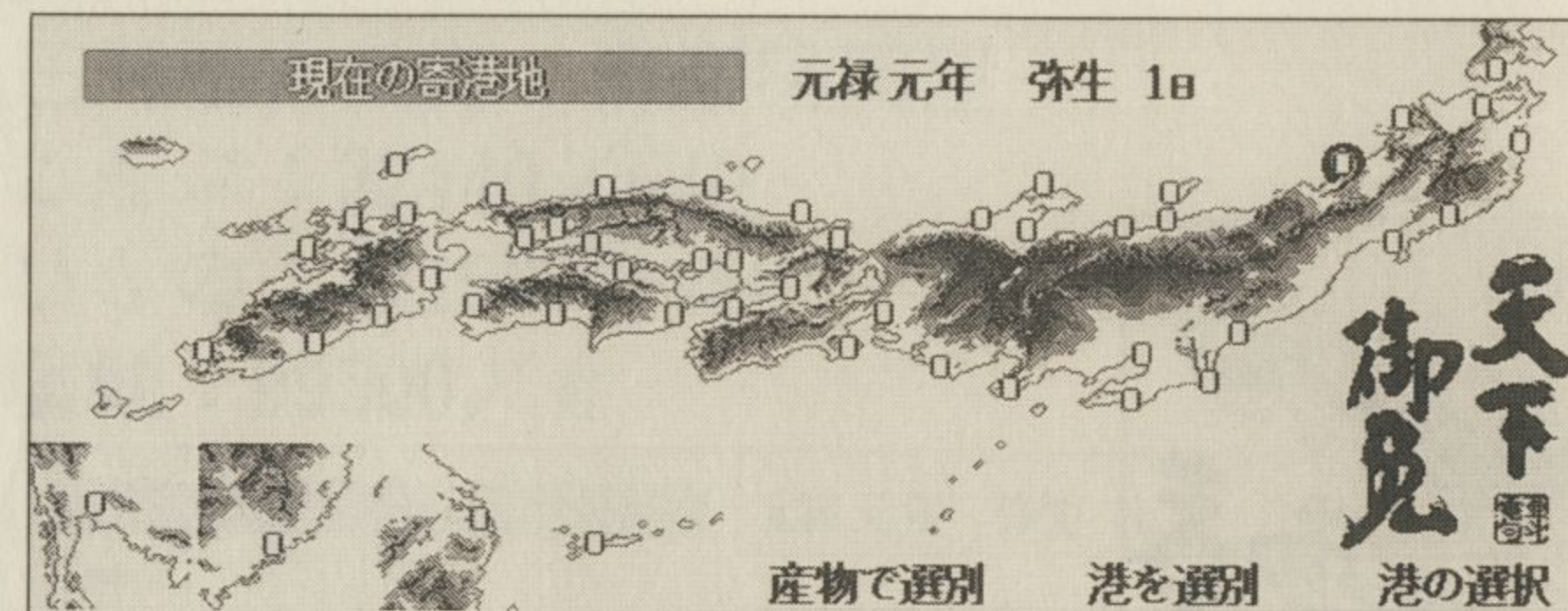
こんぶ：48680／960

ひもの：41250／1500

ろうそく：16195／450

炭：8750／180

紅花：55485／1280



釜石：盛岡藩

39日

三河屋吉兵衛：海産物問屋

中村屋熊八：染物問屋

ひもの：41200／1500

鰹節：28920／1200

焼酎：6930／180

紫根：25255／640

漆：21036／550

雑材：25986／869



石巻：仙台藩

32日

上州屋捨三郎：海産物問屋

蝦夷屋吉兵衛：呉服問屋

梅田屋源蔵：染物問屋

船橋屋利吉：紙問屋

干し貝：65470／1920

鰹節：22720／1000

ちりめん：7718／195

紬：11726／310

紅花：60195／1680

和紙：297744／788



小木：幕府直轄

90日

上方商人

こんぶ：32440／646

するめ34380／1212：



寺泊：長岡藩

90日

上方商人

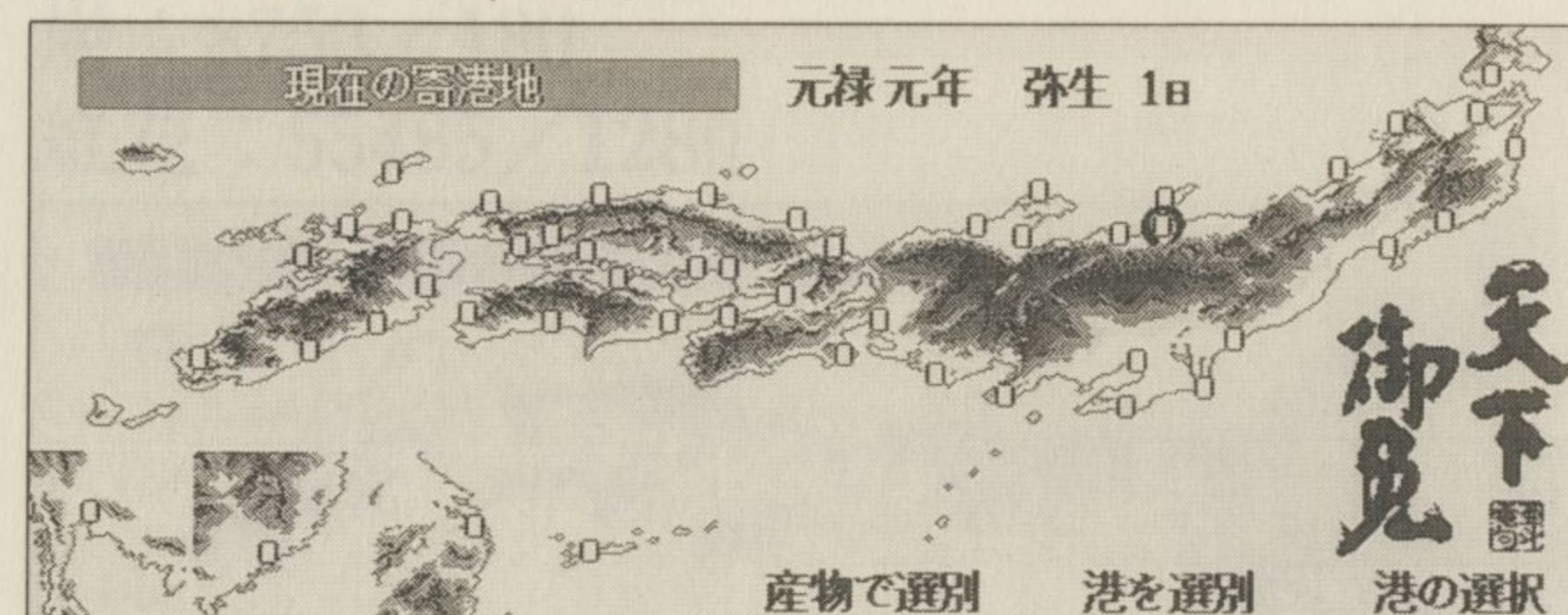
こんにゃく：20920／0

絹：3360／82

ちりめん：3953／116

漆：57500／1464

雑材：17582／565



那珂湊：水戸藩

15日

上州屋捨三郎：海産物問屋

生駒屋十兵衛：穀物問屋

水戸屋木兵衛：呉服問屋

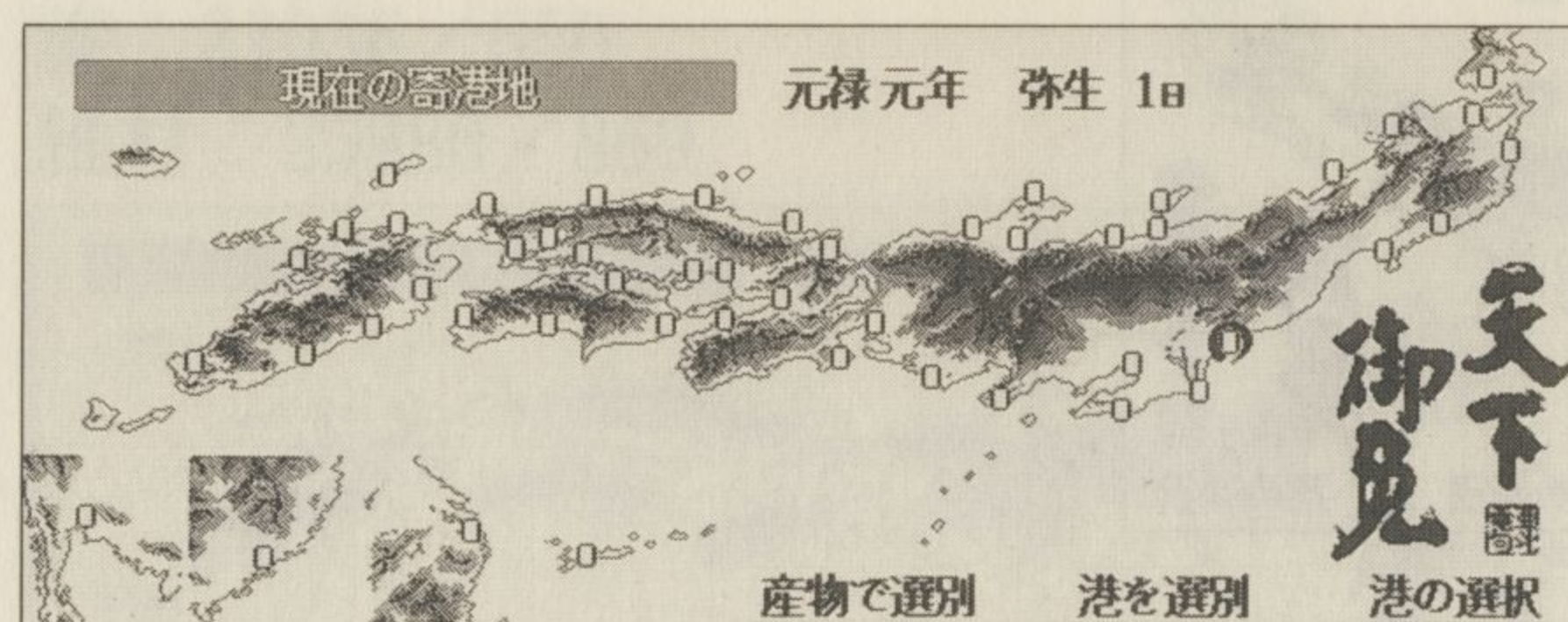
うなぎ：49600／1900

そば粉：127520／1200

こんにゃく：151720／0

石炭：64370／1650

木綿：27145／640



銚子：幕府直轄

11日

上州屋捨三郎：海産物問屋

両国屋清五郎：穀物問屋

上州屋新右衛門：穀物問屋

三国屋六兵衛：酒問屋

ひもの：41150／1400

味噌：56770／1100

醤油：42720／1000

酢：56250／1300

清酒：15790／80



コラム——江戸よもやま話 4

江戸っ子どうし、裸の付き合い——風呂と銭湯

江戸に初めて大衆浴場ができたのは、家康入府すぐのこと。ただし、このころの風呂とは、今でいうサウナ風呂のこと。男は風呂ふんどし、女は腰巻を着けて入り、湯女が竹のへらで垢をこそげ落とすやり方だった。後に、この湯女が売春をするようになり、私娼を認めない幕府の方針で、湯女は全面的に禁止されるようになる。

当時は、湯の中にからだをつける風呂は「湯屋」と呼ばれ、蒸し風呂は「風呂屋」と呼ばれていた。また、江戸初期の風呂屋は、入浴料として、一人につき永銭一文を徴収したところから、大衆浴場を徐々に「銭湯」ともいうようになった。

江戸の銭湯は当初、男女別々であったが、中期以降、男女混浴が、いつの間にか普通のことになっていた。こうした風紀の乱れに、頭の固いお役人が黙っているはずはなく、「寛政の改革」の松平定信、「天保の改革」の水野忠邦の二老中が混浴禁止令を出したが、いずれの場合も、結局元に戻ってしまったようだ。

直江津：高田藩

95日

上方商人

そば粉：126820／808

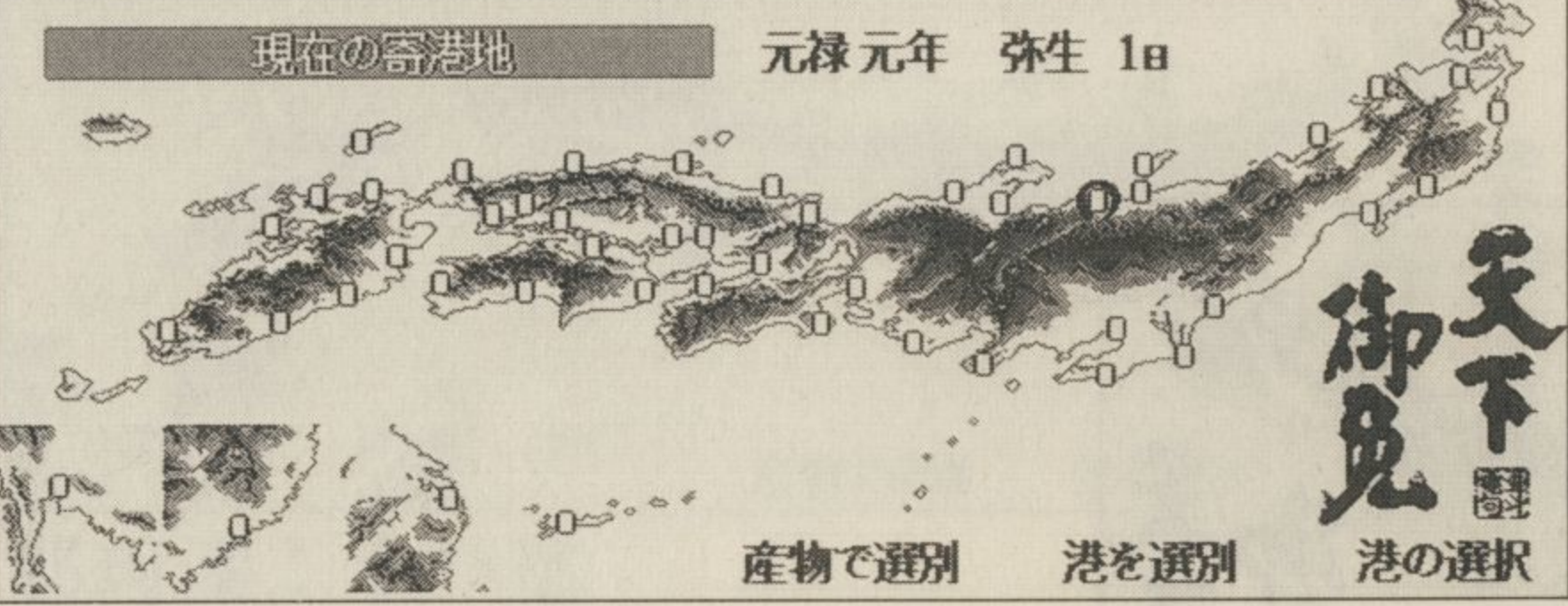
麻：15976／0

木綿：7305／181

絹：7460／183

ちりめん：7180／166

紬：12186／282



小湊：幕府直轄

8日

伊勢屋伝兵衛：海産物問屋

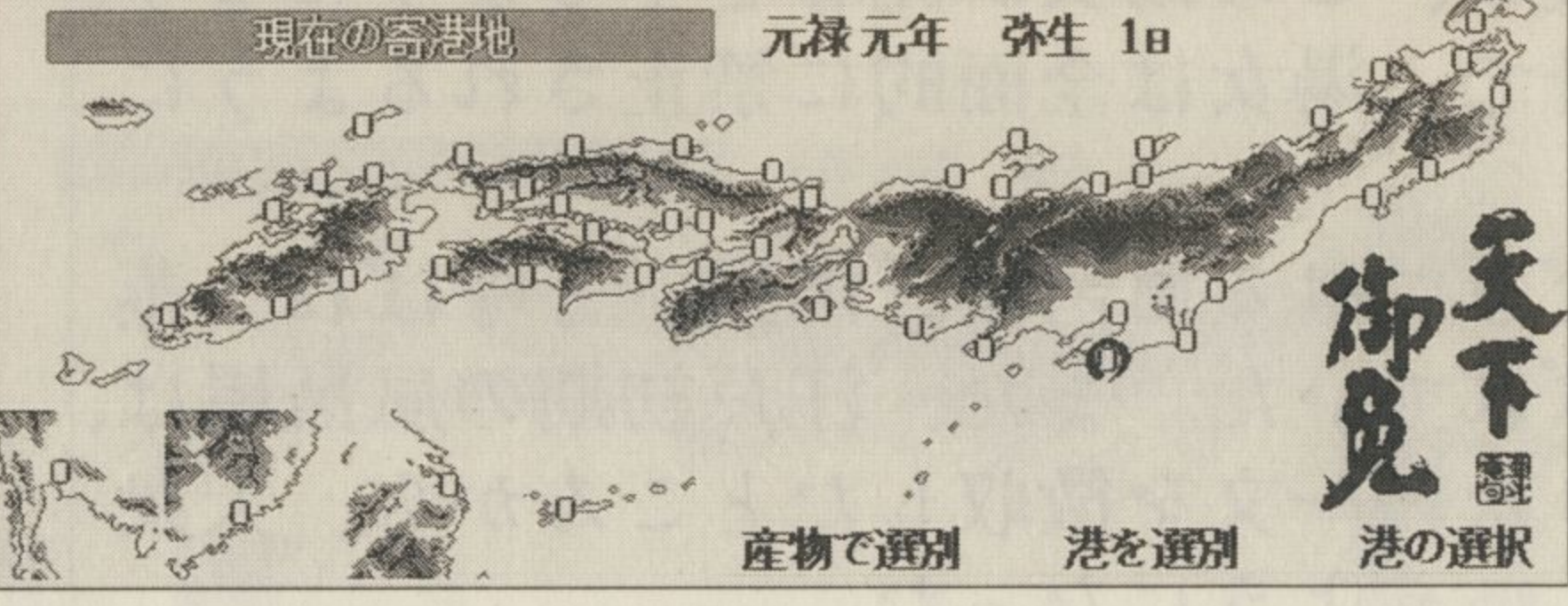
柏屋右左衛門：呉服問屋

のり：33450／1600

干し貝：65330／1820

ひもの：40750／1000

木綿：5330／115



輪島：幕府直轄

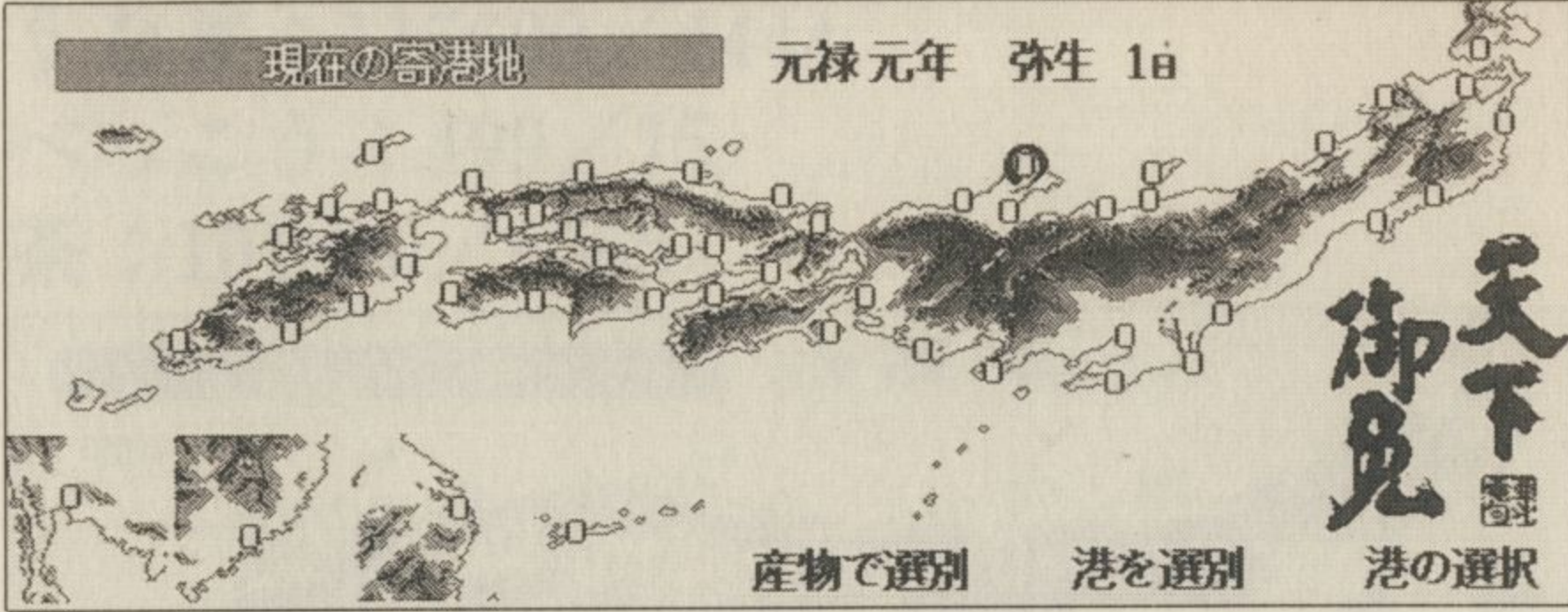
101日

上方商人

干し貝：64400／1939

するめ：34280／1111

ちりめん：2474／35



伏木：富山藩

98日

上方商人

ひもの：41250／1515

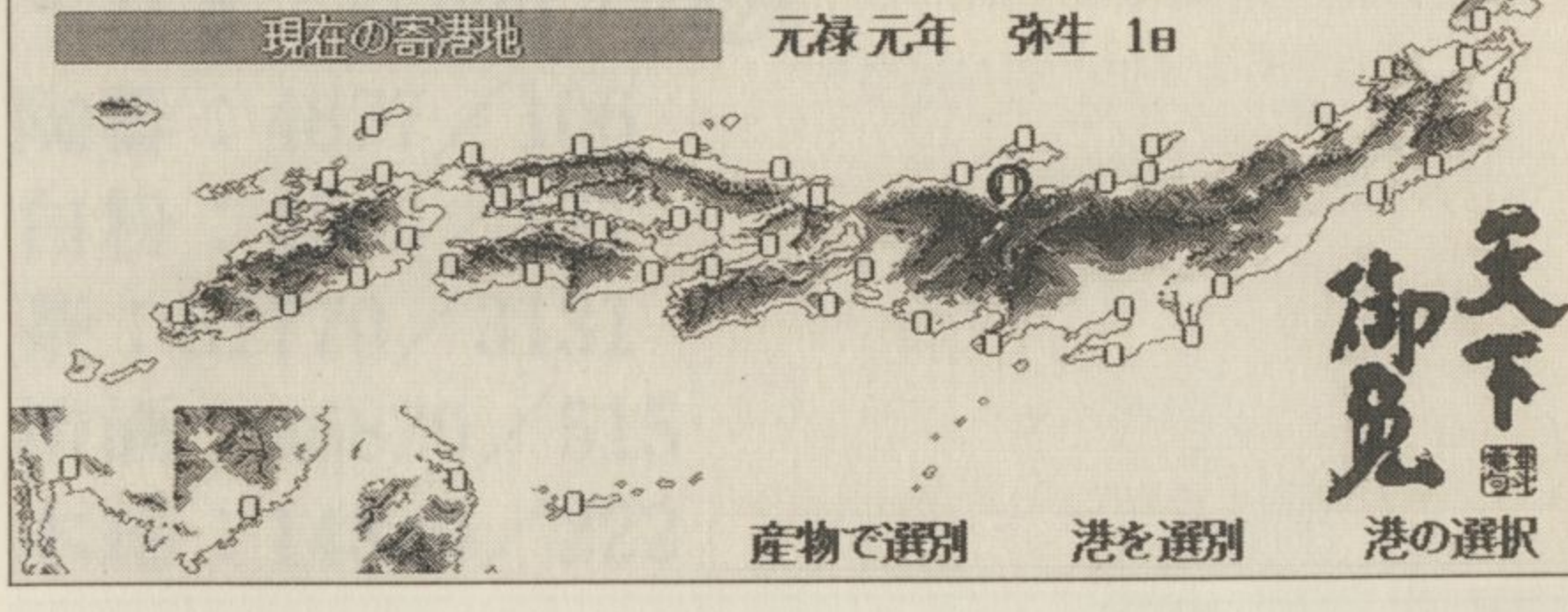
白粉：8145／191

麻：15976／0

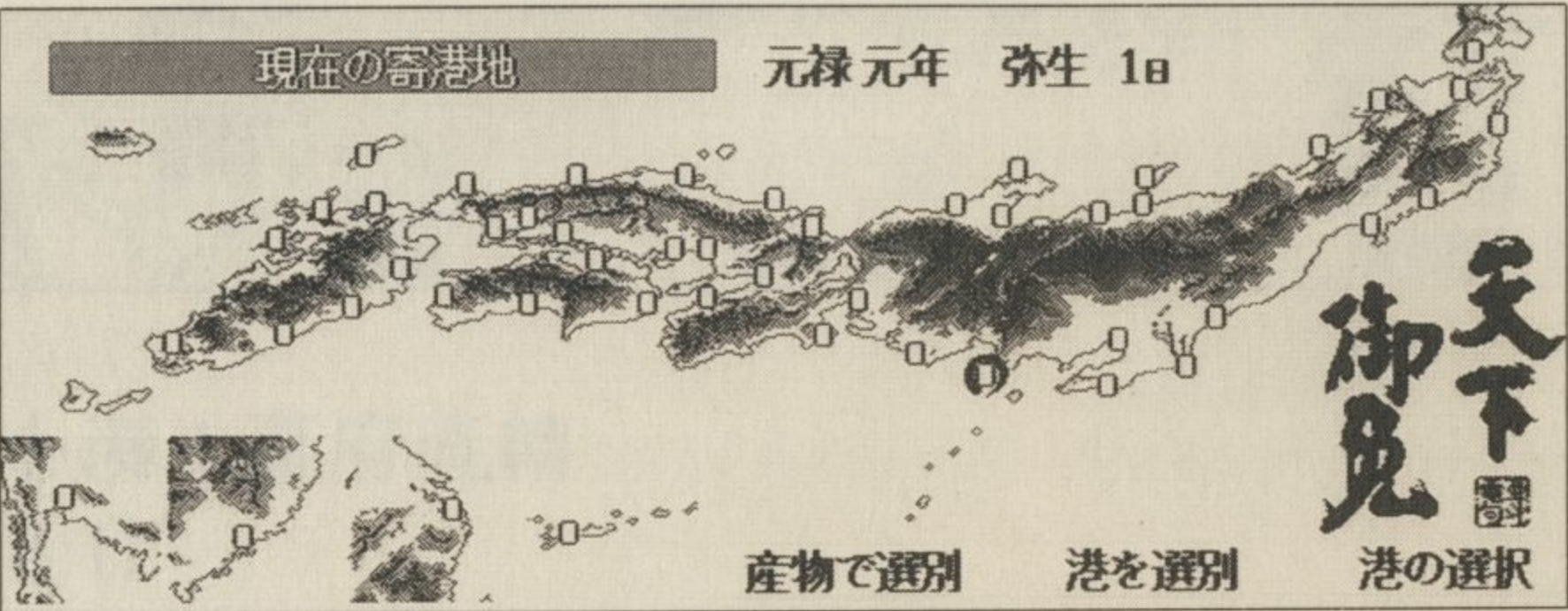
木綿：5315／111

漢方薬：467／9

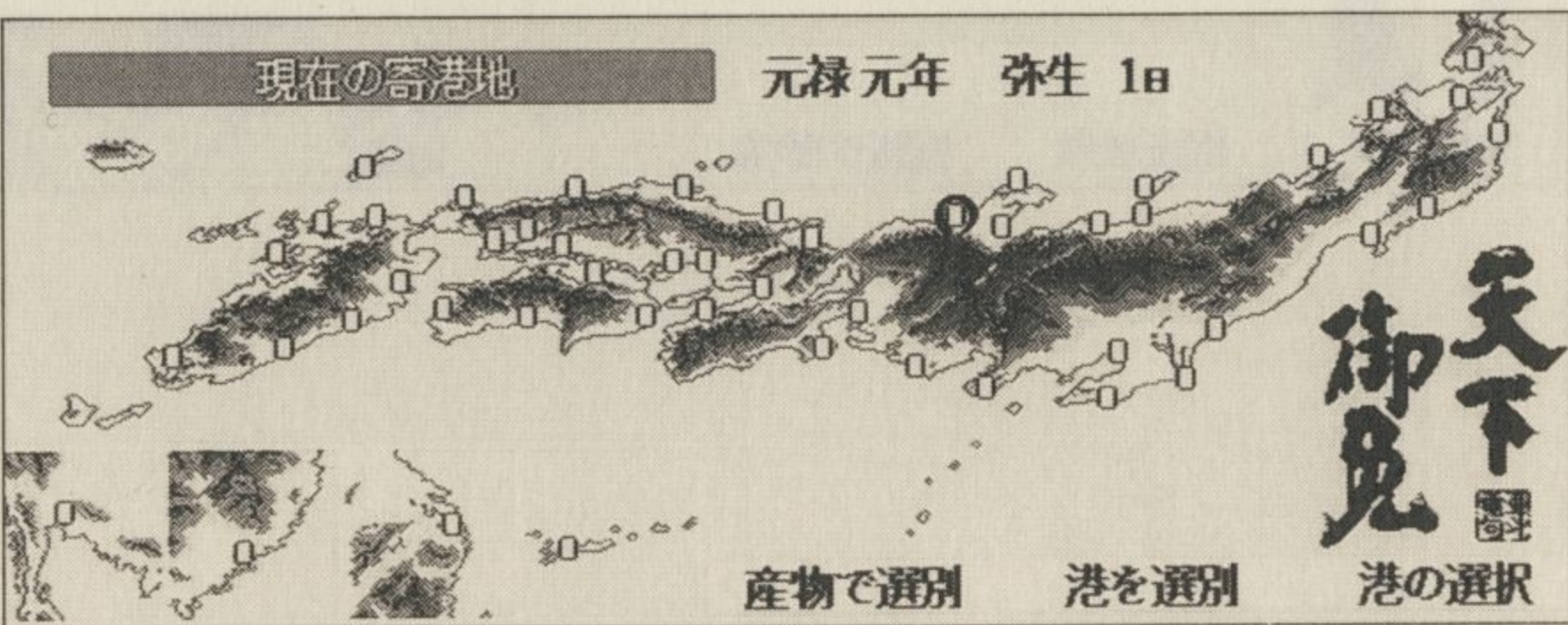
薬草：8901／240



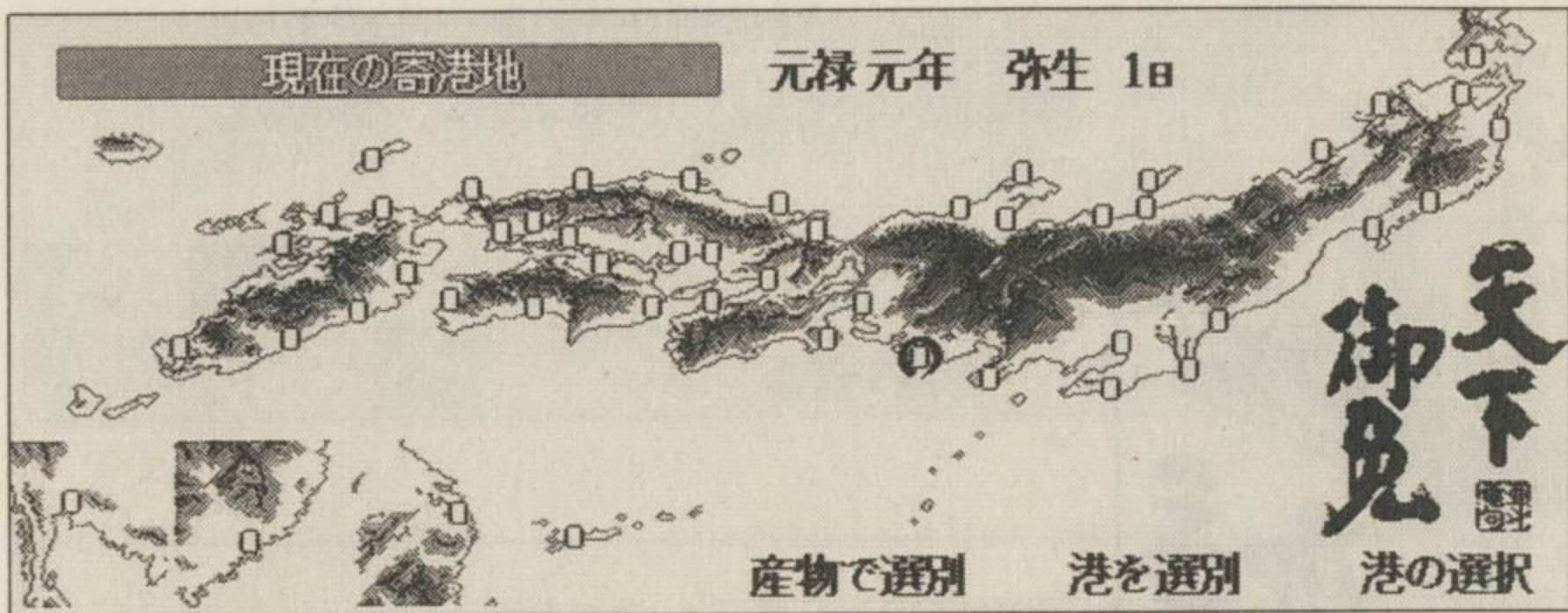
下田：幕府直轄
9日
上方商人
上州屋捨三郎：海産物問屋
遠州屋与助：小間物問屋
神田屋梅太郎：油問屋
備前屋冬吉：材木問屋
ひもの：40750／1010
鯉節：41700／909
べっこう：1026／30
炭：41860／1161
雑材：27438／868



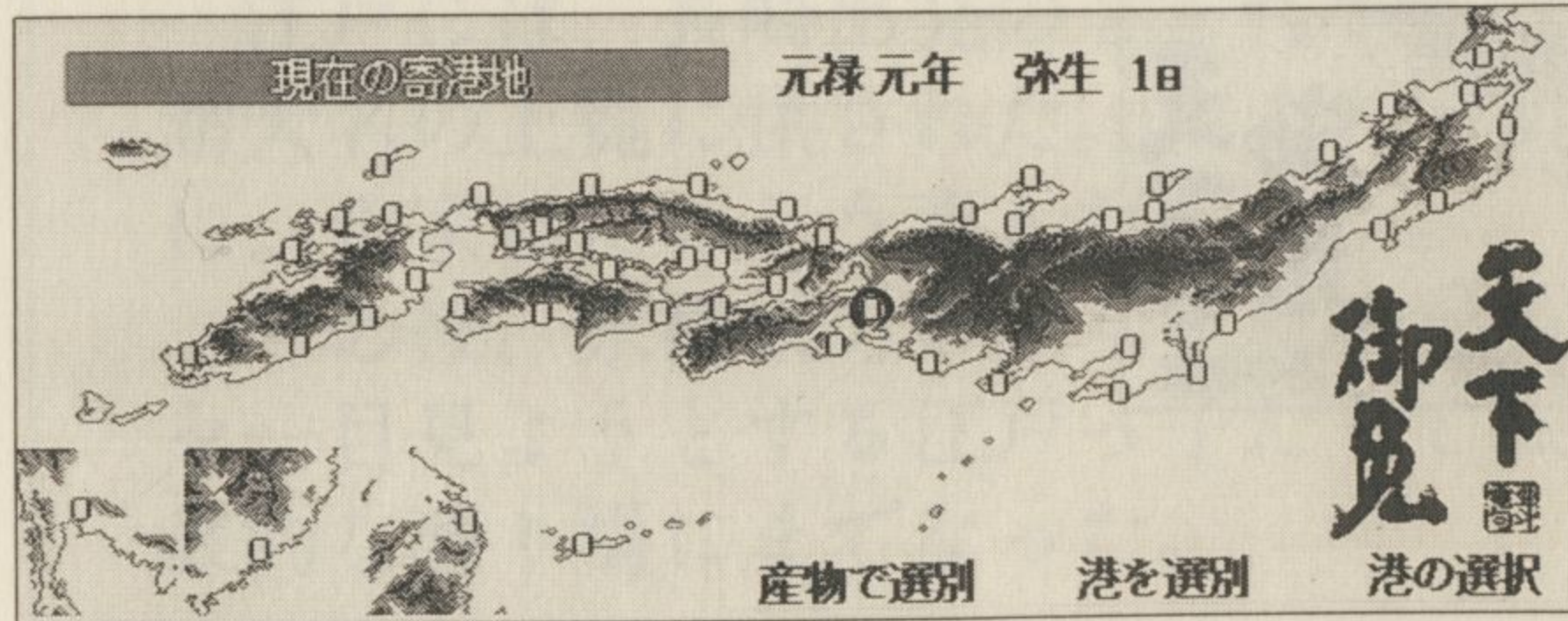
金沢：加賀藩
96日
上方商人
塩鮭：43800／0
陶器：5400／131
白粉：4069／90
麻：18872／0
絹：7536／184
ちりめん：7322／212



浜松：幕府直轄
14日
上方商人
伊勢屋伝兵衛：海産物問屋
越後屋仁左衛門：小間物問屋
生駒屋十兵衛：穀物問屋
うなぎ：115600／4444
べっこう：499／15
茶：101820／6565



名古屋：尾張藩
21日
上方商人
駿河屋仙吉：小間物問屋
美濃屋麻衛門：穀物問屋
奥洲屋又平：酒問屋
うなぎ：66020／2424
陶器：4877／106
白粉：4565／111
茶：51770／3131
清酒：46820／515
木綿：14840／222



志摩：幕府直轄

18日

上方商人

白木屋茂兵衛：小間物問屋

紀伊国屋文左衛門：材木問屋

奈良屋茂左衛門：材木問屋

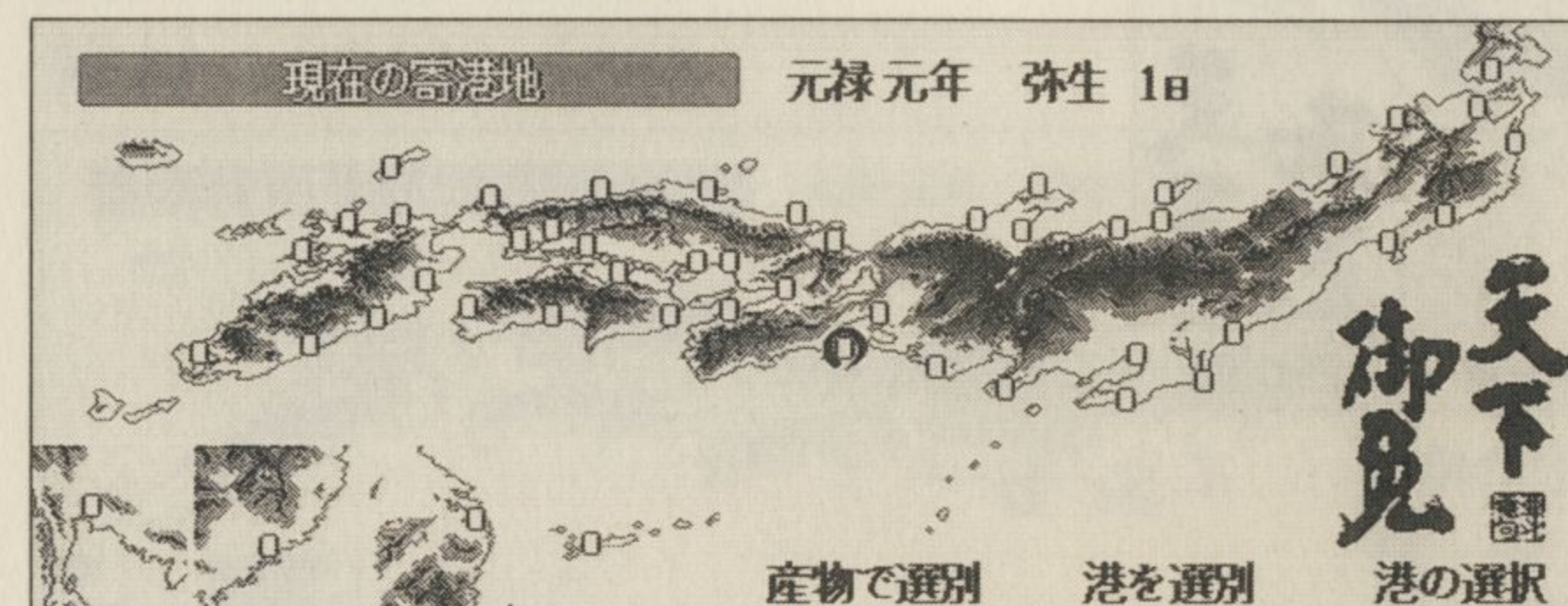
のり：33280／1414

鯉節：40800／1010

べっこう：428／11

杉材：42049／1022

雑材：27078／828



宮津：宮津藩

92日

上方商人

炭：27680／757

ちりめん：8033／217

和紙：28203／742

硯石：1249／30

杉材：13318／315

雑材：28708／757



柴山：豊岡藩

86日

上方商人

ろうそく：48240／1262

木綿：15995／318

紬：4836／111

石材：42358／1046



コラム——江戸よもやま話 5

生まれて初めて見る、異国の動物——江戸に象が来た日。

享保10年（1729）。五歳と七歳のオスの象二頭が、はるばる広南から長崎に運ばれてきた。この、江戸時代の人間には馴染みのない不思議な動物を、「どうしても見たいっ」といってきかなかったのは、時の将軍吉宗。五歳の方の象は着いてまもなく死んでしまったので、残りの一頭が、急遽江戸へ運ばれることになった。1日20キロのスローペースで、街道の町人たちの驚きと土下座に見送られながら、陸路を東へ進む。

途中の京都では、中御門天皇が「是非見てみたい」と仰せられたが、宮中へは位のある者しか入ることのできないしきたりがある。そこで、天皇は、この象に「広南従四位白象」という位を授け、謁見を許可された。

江戸には、長崎出発の2ヶ月半後に到着し、江戸城中で吉宗と諸大名の上覧に供された。生まれて初めて見るこの不思議な動物に、吉宗はたいそう喜んだという。

その後、京橋東方の采女ヶ原の乗馬練習場で飼育されたが、象を一目見ようとする江戸っ子たちで賑わい、采女ヶ原は江戸の代表的な盛り場にまでなった。

堺：幕府直轄

35日

すべての江戸商人

香：7360／161

茶：51200／3232

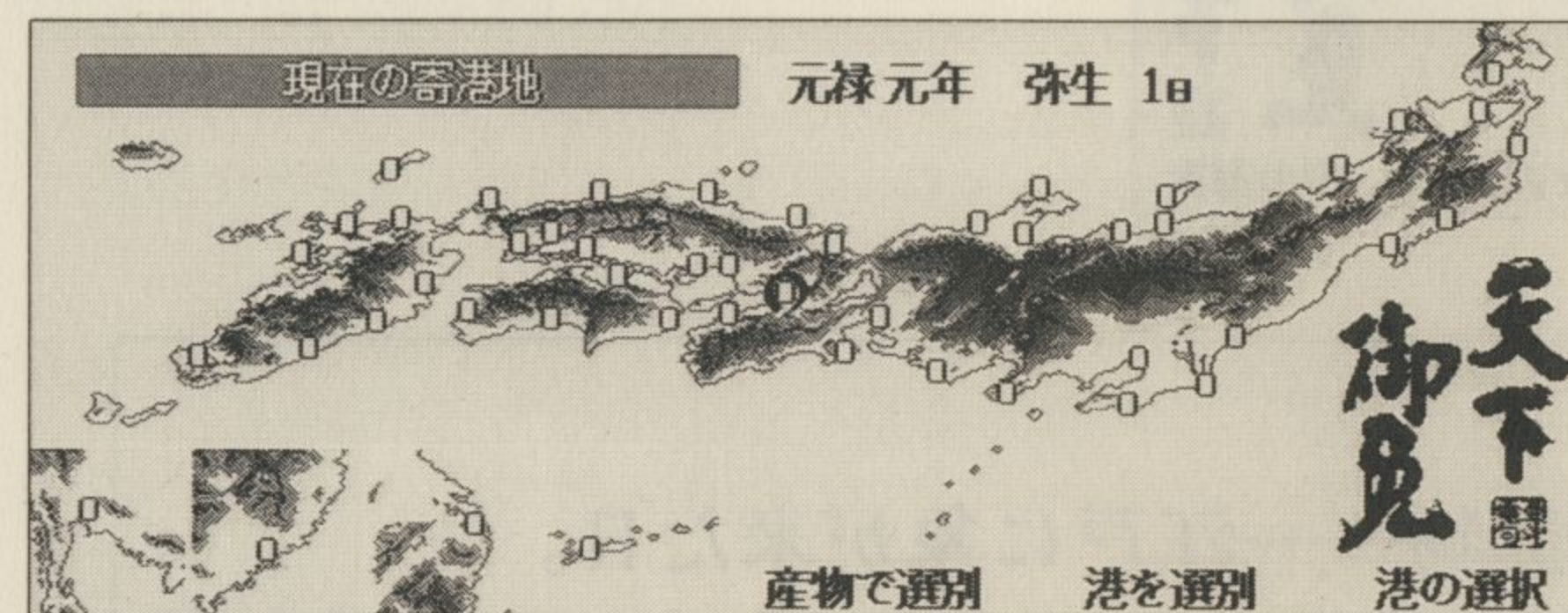
味噌：57000／1010

清酒：342000／2020

ちりめん：7910／212

墨：5853／144

※堺にはこの他に、全国のあらゆる産物が、上方商人の手で運び込まれている。



姫路：姫路藩

38日

上方商人

両国屋清五郎：穀物問屋

三国屋六兵衛：酒問屋

奥洲屋又平：酒問屋

塩：60260／1565

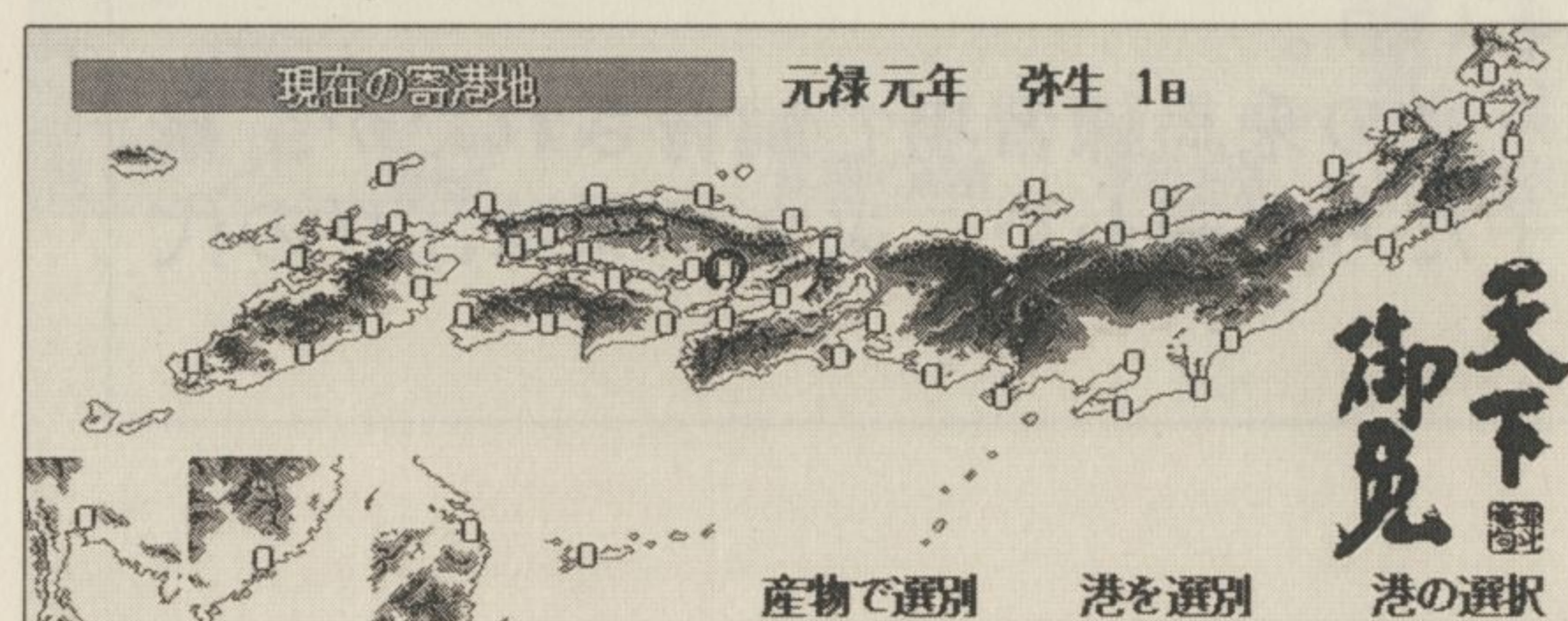
醤油：112020／2828

酢：90020／2222

清酒：204100／909

木綿：13405／222

絹：7464／187



和歌山：和歌山藩

32日

上方商人

美濃屋朝兵衛：穀物問屋

鹿島屋籐庵：紙問屋

清水屋太郎兵衛：材木問屋

奈良屋茂左衛門：材木問屋

陶器：4438／111

味噌：58510／909

醤油：56520／909

清酒：149720／1212

墨：1336／32

石材：33428／915



松江：松江藩

77日

上方商人

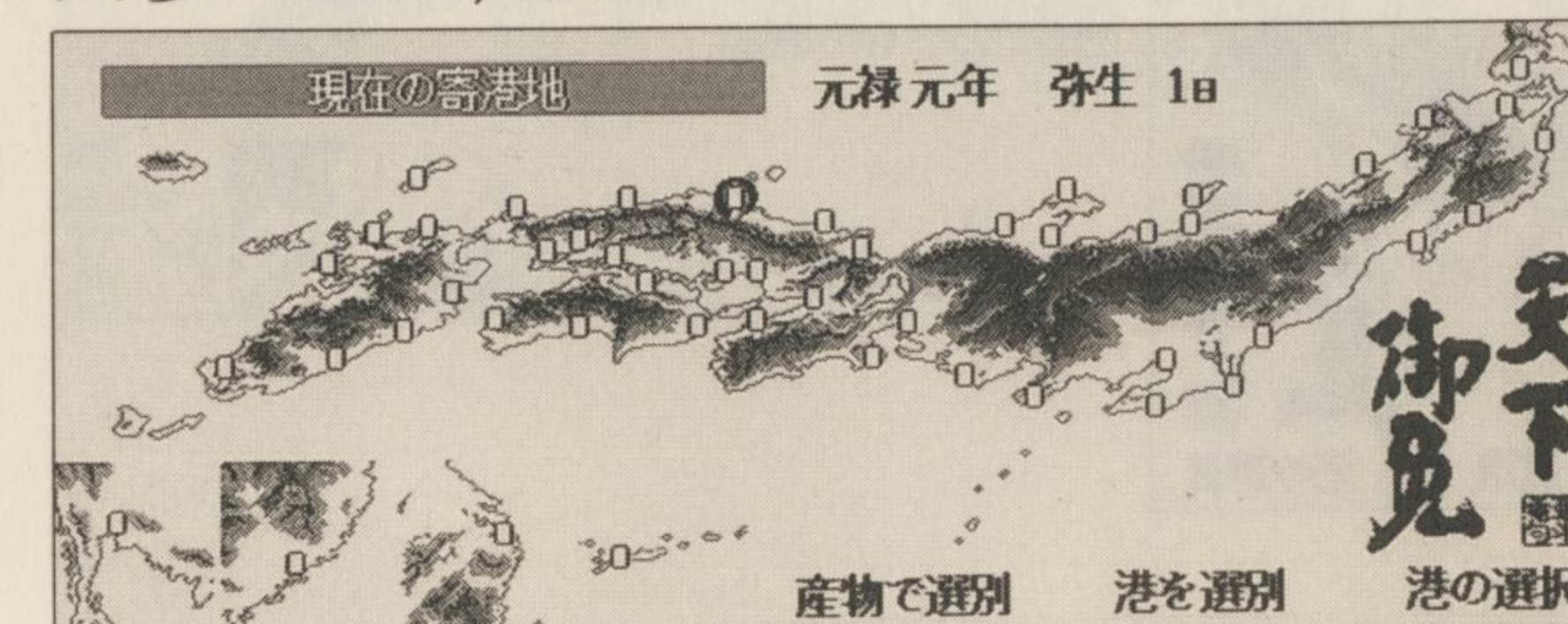
ひもの：41250／1515

漆：61550／1565

漢方薬：468／11

薬草：8322／220

人参：1035／28



赤穂：赤穂藩

38日

上方商人

尾張屋参吉：酒問屋

塩：65480／1818

味噌：58750／1111

醤油：57020／1414

清酒：39520／202



徳島：徳島藩

32日

上方商人

和泉屋勘次：海産物問屋

遠州屋与助：小間物問屋

寿屋香助：油問屋

塩：44790／1212

煙草：31820／0

そば粉：111720／606

砂糖：19060／404

火打石：46486／610

藍：40480／1050



丸亀：丸亀藩

42日

上方商人

柏屋右左衛門：呉服問屋

富士屋伊之吉：染物問屋

塩：49590／1414

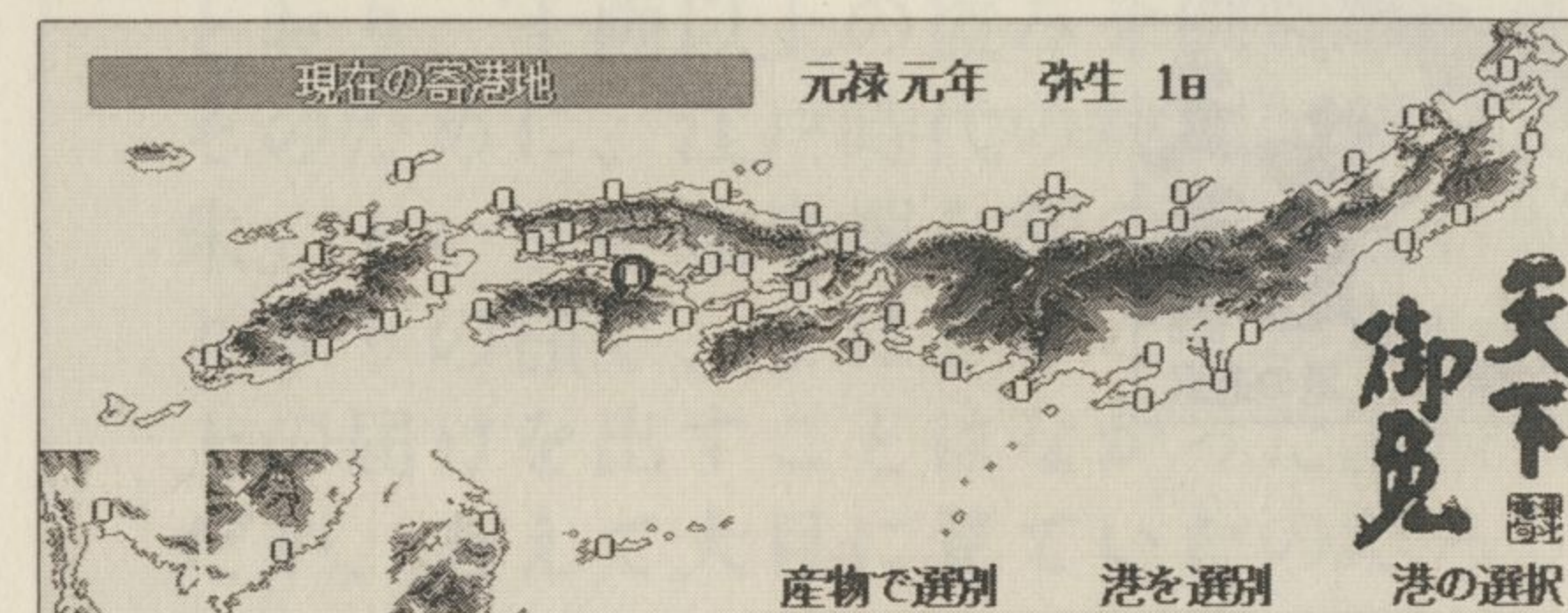
煙草：47720／0

麻：8988／0

木綿：11195／191

藍：37145／888

雑材：27538／868



浜田：浜田藩

69日

上方商人

のり：33450／1616

漢方薬：357／8

薬草：922／28

和紙：20786／555



福山：福山藩

44日

上方商人

神田屋梅太郎：油問屋

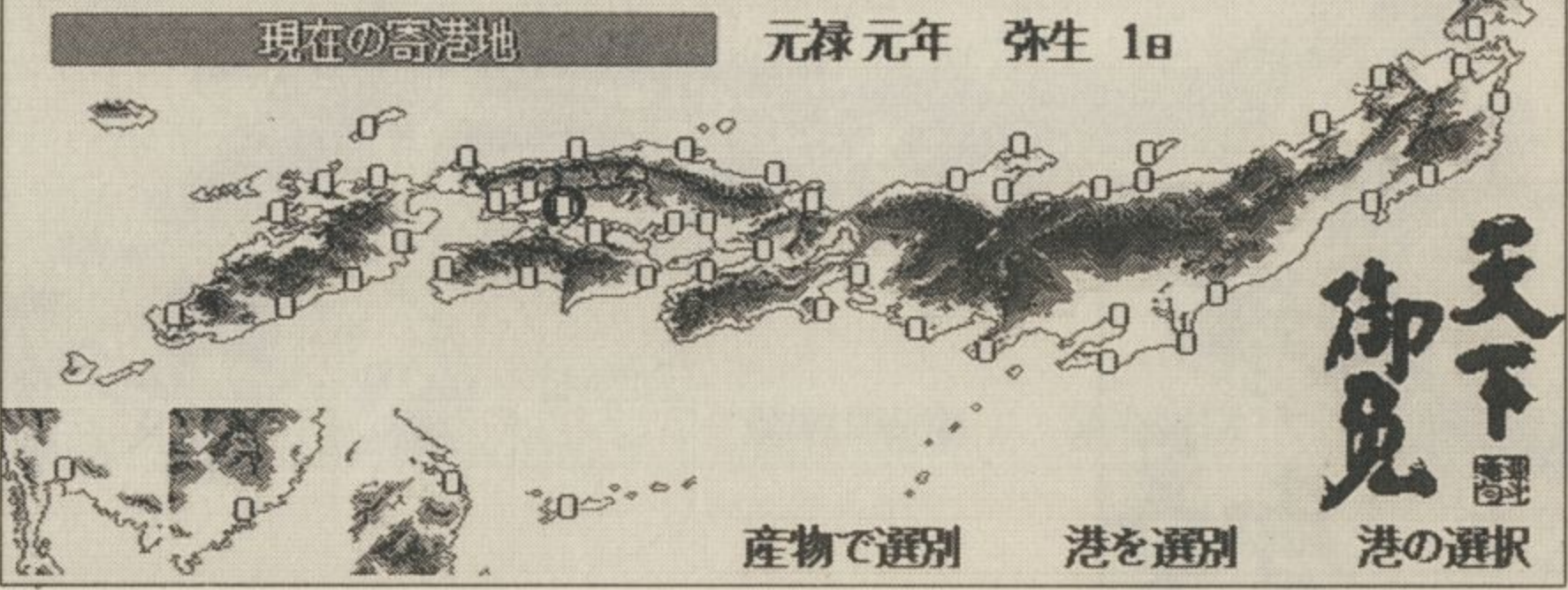
清国屋春吉：呉服問屋

塩：49060／1414

油：23380／505

木綿：15080／292

藍：19635／444



広島：広島藩

51日

上方商人

稲葉屋時兵衛：油問屋

蝦夷屋吉兵衛：呉服問屋

梅田屋源蔵：染物問屋

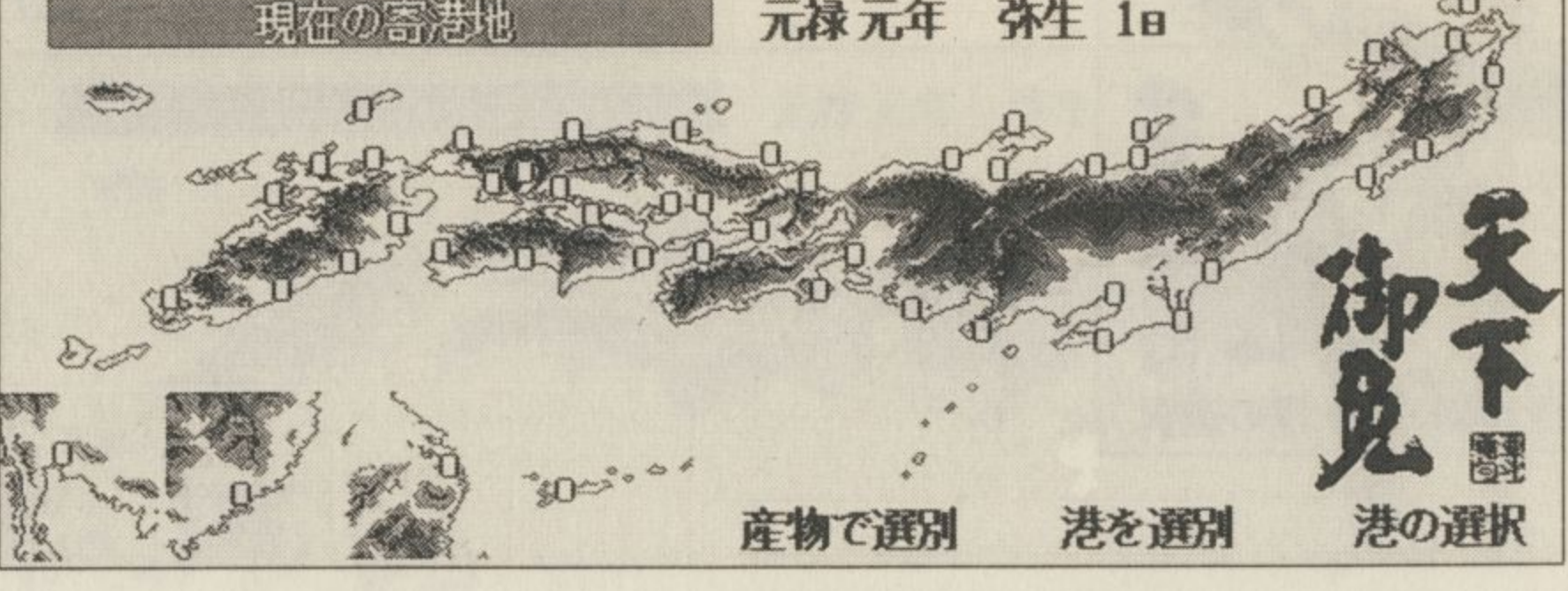
干し貝：65410／1838

油：80620／1818

絹：7611／189

藍：21525／525

和紙：27647／805



コラム——江戸よもやま話 6

十両盗めば、首が飛ぶ——江戸の金銭感覚。

「これ小判 どうか一晩いてくれろ」という川柳が残るほど、小判は、一般庶民には縁のないものだったらしい。ちなみに当時、一両で買えたものというのは、木綿なら十反、酒なら一升瓶で五十四本。駕籠賃にすると、日本橋から東海道・藤沢あたりまで、となる。人件費にしてみると、女中の給金が一年間で一両（幕末の頃は三両）、大工は15日で一両、人足は16日で一両を、平均的に稼いでいた。

また、よく時代劇などで「十両盗めば、首が飛ぶ」といわれるとおり、十両以上の盗みを働けば、死罪は免れないところだった。そのために、江戸時代の裁判記録「犯科帳」には、「九両三分二朱」という中途半端な額の被害届けが多い。これは十両未満のぎりぎりの額で、よほどのことがない限り、被害者の方でも十両以上の届けを出すことはなかった。役人の方でも分かっていたはずだが、あえて大目に見ていたのだろう。

高知：土佐藩

41日

上方商人

和泉屋勘次：海産物問屋

上総屋新右衛門：穀物問屋

清水屋太郎兵衛：材木問屋

のり：20520／606

ひもの：40750／1010

鰹節：107400／4040

砂糖：16510／383

雑材：27076／775

石材：34058／844



岩国：岩国藩

51日

上方商人

春木屋幸吉：油問屋

木戸屋木兵衛：呉服問屋

油：40710／909

木綿：15790／323

ちりめん：7848／232

和紙：27765／719



萩：長州藩

65日

上方商人

するめ：30670／858

陶器：5705／141

ろうそく：44860／1060

石炭：31570／858

藍：21780／545

硯石：697／18



宇和島：宇和島藩

51日

上方商人

奥洲屋又平：酒問屋

三島屋矢吉：染物問屋

武州屋桜斎：紙問屋

ひもの：40650／909

焼酎：62130／1555

藍：40875／1020

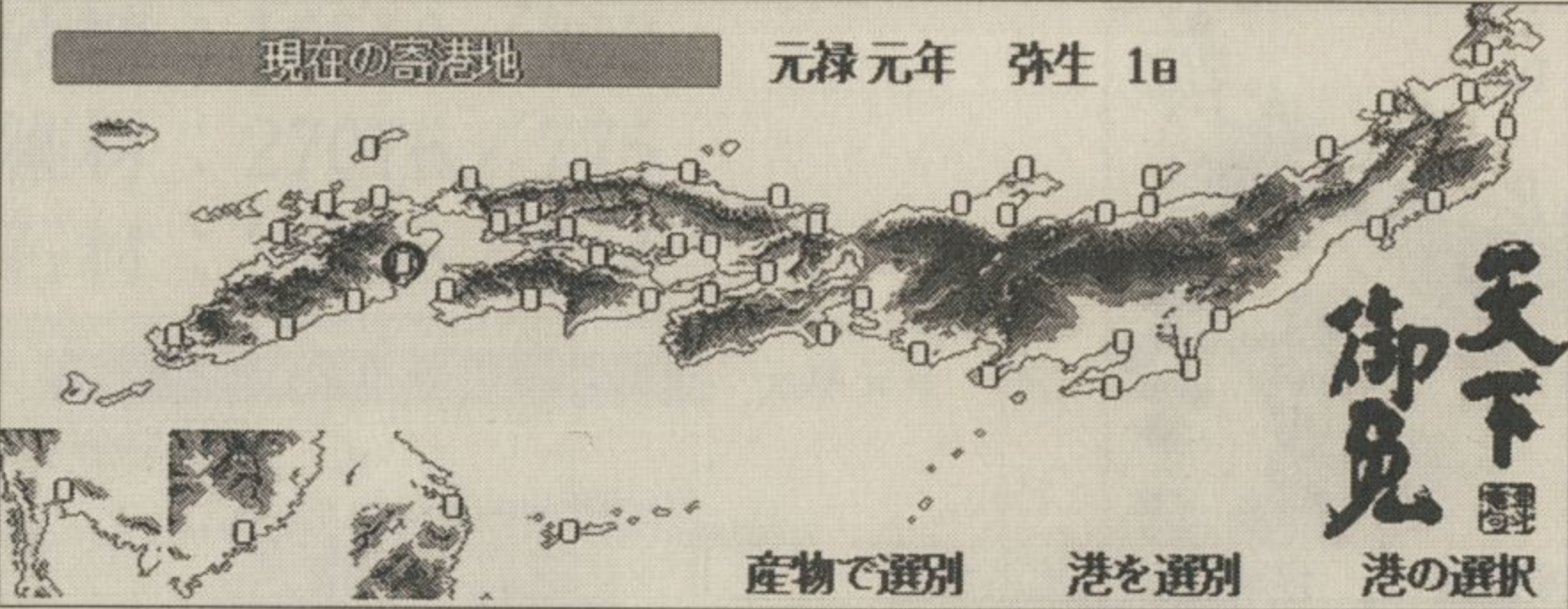
和紙：29134／787

雑材：27318／767

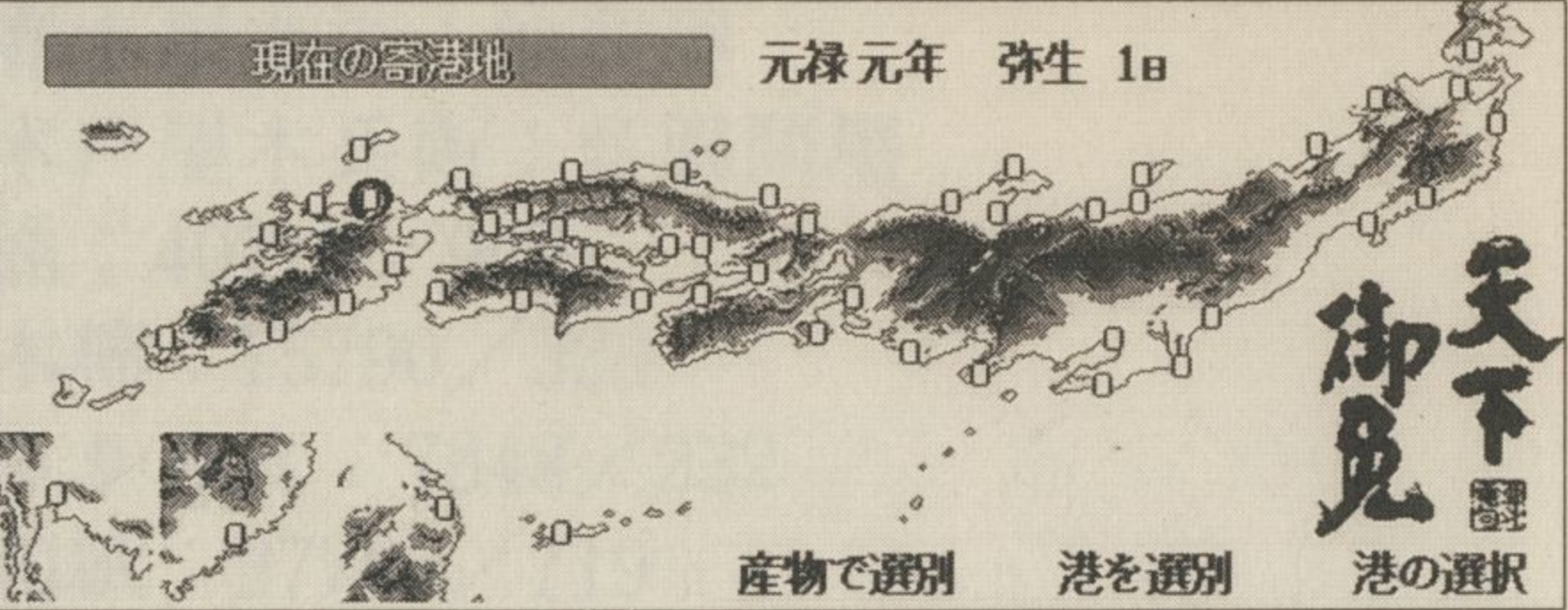
石材：34128／814



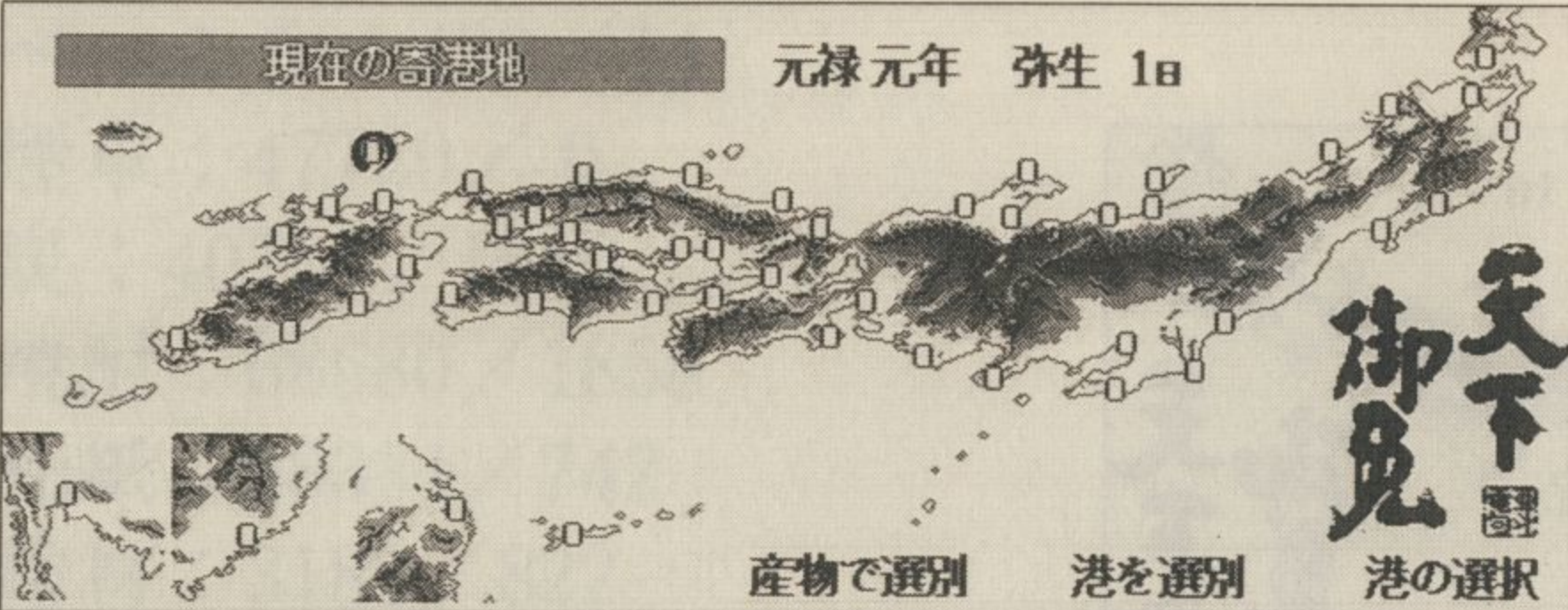
府内：府内藩
53日
上方商人
清国屋春吉：呉服問屋
備前屋冬吉：材木問屋
火打石：16496／580
木綿：15490／313
檜材：44052／1094
雑材：34708／858



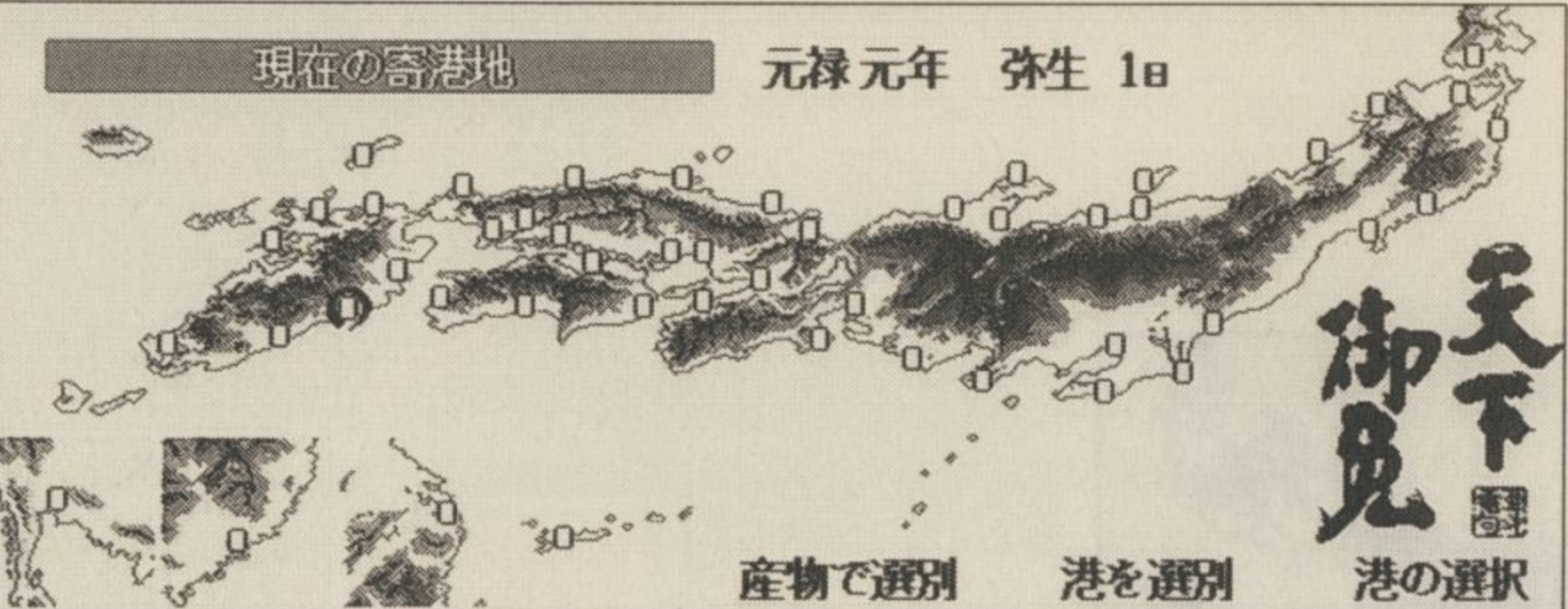
博多：福岡藩
65日
上方商人
するめ：34600／959
ろうそく：49050／1161
石炭：61750／1555



府中：対馬藩
71日
上方商人
栄屋田楽：薬問屋
するめ：34770／959
薬草：44601／109
人参：626／18



延岡：延岡藩
51日
上方商人
寿屋香助：油問屋
紀伊国屋文左衛門：材木問屋
油：13080／202
ろうそく：49730／1131
炭：40870／1060
和紙：28665／757
杉材：29563／719
檜材：347852／892



唐津：唐津藩

68日

上方商人

越後屋仁左衛門：小間物問屋

ひもの：40650／909

陶器：5705／141

石炭：64370／1666

石材：42338／1026



長崎：幕府直轄

77日

上方商人

中村屋熊八：染物問屋

近江屋孫左衛門：薬問屋

大久保屋時助：薬問屋

最上屋善兵衛：紙問屋

紫根：4947／242

漢方薬：1668／81

薬草：4296／210

人参：1128／58

硯石：1873／88

石材：20814／1016



高鍋：高鍋藩

54日

上方商人

駿河屋仙吉：小間物問屋

多田屋市左衛門：酒問屋

船橋屋利吉：紙問屋

奈良屋茂左衛門：材木問屋

べっこう：489／14

煙草：47720／0

炭：40710／1010

焼酎：68680／1858

和紙：28334／742

檜材：3182／822



コラム——江戸よもやま話 7

栄華の名残を残す、淀屋橋——浪花の豪商、淀屋。

あまり知られていないが、江戸時代の豪商として有名なお店に、大阪の淀屋がある。初代の淀屋は材木商を振り出しに、堂島の米相場の元を開き、そのうちに干鰯の商いで大きな富をつくるまでになった。

次の二代目が、あり余る財産を湯水の如く、浪費し始める。自分の邸宅の天井にギヤマンを張り巡らせて水を貯め、そこに金魚を飼って涼を求めるという、当時としては考えられない贅沢なことまでした。これだけの贅沢をしても、淀屋の屋台骨はびくともしない。なにしろ、幕府の年間予算の十数倍もの財産を貯えていたというから、いかに富裕な商人であったかがわかるだろう。

しかし、贅沢をすればするほど、庶民には嫌われ、お上には睨まれる。五代目（一説には四代目）の辰五郎のときに、闕所（田畑、家財などを没収する刑罰）にされてしまった。

しかし、この淀屋の取りつぶし、贅沢が目にとったためというのは、どうやら表向きの理由らしい。実際は、多くの大名が淀屋に多額の借金をしていたため、幕府が大名を救うために、淀屋を取りつぶしたというのが、真相のようだ。

栄華を極めた淀屋は、今では「淀屋橋」という地名にのみ、その名を残している。

鹿児島：薩摩藩

65日

上方商人

尾張屋参吉：酒問屋

小池屋徳兵衛：薬問屋

べっこう：141／2

砂糖：21960／404

焼酎：68120／1727

紬：4186／111

人参：0／0

煙草：55680／0



琉球：幕府直轄

98日

薩摩藩御用商人

華僑

べっこう：3887／91

砂糖：142260／5346

焼酎：129340／3240

紬：25336／610

人参：4307／108



寧波：幕府直轄

99日

華僑

西洋商人

油：22400／570

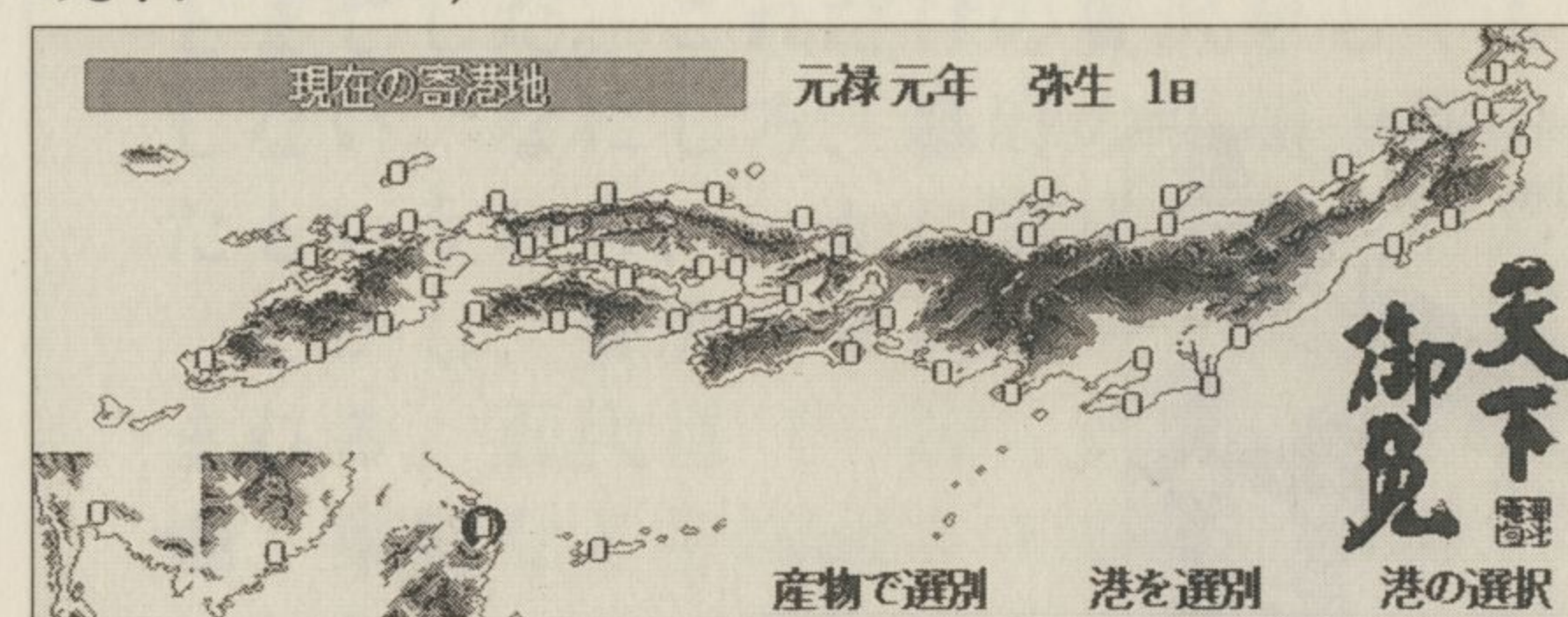
紫根：12255／340

漢方薬：3533／88

薬草：3472／78

人参：8239／205

硯石：2169／50



広州：幕府直轄

114日

華僑

西洋商人

紅花：55485／1280

漢方薬：5695／186

薬草：1142／28

人参：8239／245

阿片：81／2

こんぶ：0／0



アユタヤ：幕府直轄

158日

華僑

西洋商人

べっこう：3477／81

火打石：16486／871

麻：29816／840

阿片：163／4

ガラス器3769／90

洋酒：3577／98



コラム——江戸よもやま話 8

大和撫子の基本——内股歩きの起源。

内股で静かに歩く歩き方は、日本女性の慎み深さの象徴として、今でも残っている。だが、この歩き方、それほど歴史のあるものではなく、その起源は江戸時代にある。

この歩き方を発明したのは、歌舞伎の中村富十郎。女形として、演技の中でより女らしさを表現するため、両股をくっつける形で歩く演技を考えだしたのが、その始まり。この歩き方に、さらに工夫を加えたのが、坂東三津五郎で、股の間に一枚の紙を挟み、激しい踊りを踊っても、それを落とすことがなかったといわれる。それ以来、女形を目指す役者は、股の間に紙を挟んで、歩き方の練習をするようになった。

この女形の歩き方が、花柳界の女性たちにも真似されるようになり、やがて一般的な女性の歩き方のお手本として見習われるようになった。

日本女性のもっとも特長的な歩き方が、実は男の考えだしたものである、というのは、なんとも皮肉なものである。

■世話役（せわやく）…幕府接待役
商業に関する権限は特にないが、役柄上、諸藩からの賄賂が集まりやすく、出世競争に加わる力を持っている。
※史実にはこういう役職はない。

元禄時代の貨幣形態

元禄時代の貨幣単位（ゲーム中で扱われるもの）は、両（りょう）、分（ぶ）、朱（しゆ）の三段階に分かれている。現代の、10で次の位に上がる単位と違って、4で次の位に上がる。つまり、「1両＝4分＝16朱」であり、「14朱」の場合は、「3分2朱」と表される。

コラム——江戸よもやま話3

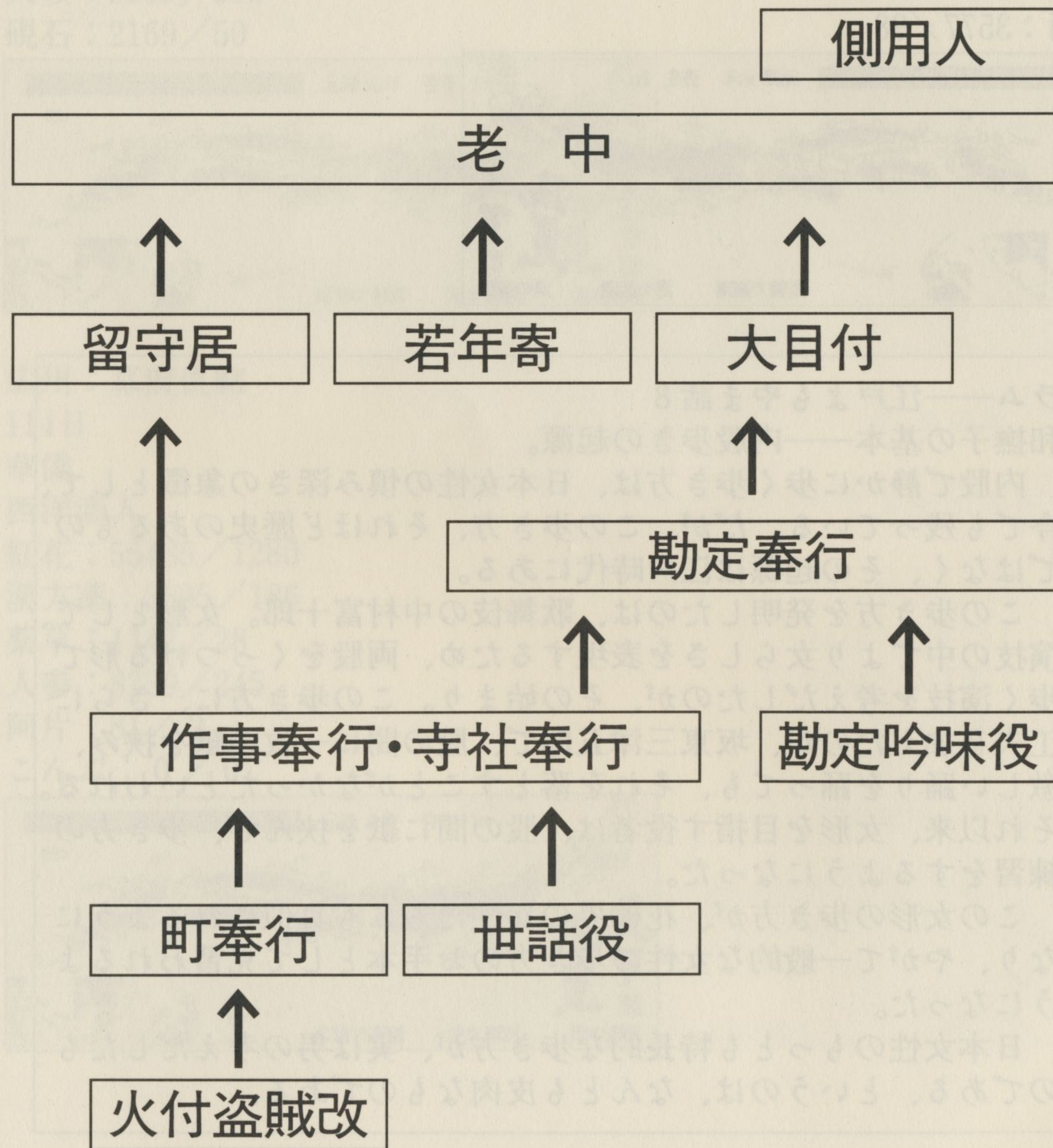
「下に1、下に1」——大名行列のあれこれ。

殿様の駕籠を中心にしたお供の列が、いつ果てるともなく延々と続いていく——時代劇でおなじみの、この大名行列。町人はもちろん土下座しなければならず、のんきに見物などはしては行かない。多い時には千人にもなる行列が通り過ぎるまで、道を渡ることもできず、ましてや、行列を横切るようなことをすれば、無礼討ちにあっても文句はいえなかった。

ただし、その例外が、産婆と医者。人命にかかわる職業だけに、行列の方でも一時中断して通していたようだ。「大名を胴切にする子安婆」という川柳も残っている。

また、大名行列が、他の大名行列とかち合ってしまった時は、いったいどうしたか。その場合、先供という役目の侍が、「武鑑」を頼りに、紋所から相手の領地・石高を調べ、すばやく殿様に報告する。相手の方が格上の場合、先に駕籠の戸を開いて会釈しなければならない。相手が格下の場合でも、軽く答礼ぐらいは返す必要があった。それでも、同じ大名同士であれば、その程度の挨拶で済むが、相手が御三家ともなるとそうはいかない。駕籠を降り、礼をしなければならぬ決まりになっていた。それが嫌さに、葵の紋所が見えたら、急いで横丁にそれてしまうなどということも、実際にあったらしい。何不自由ない暮らしをしているように見えるお殿様にも、それなりに気苦労は多かったのかもしれない。

幕府役人出世コース



徳川幕府の要職

■老中（ろうじゅう）…幕府政務担当

將軍を除いた、幕府内の最高権力者。出世の最高位。

留守居役と側用人を除く幕府要職の任命権を持つ。通例、新たに老中に就いた者は、その任命権を活用し、政敵を解任、自分の息のかかった者を要職に配していく。

幕府直轄地に対する権限も大きく、寄港権を得るためにも重要な存在。

■若年寄（わかどしより）…幕府実務担当

大目付と並ぶ幕臣No.2。

公儀御用達の発注権を持つため、懇意にと望む商人は多い。港に対する影響力は弱い。

■大目付（おおめつけ）…諸藩監視役

若年寄と並ぶ時期老中候補。

諸藩に対して大きな影響力を持つ。諸藩管理の港の寄港権を得るには、その藩の家老だけではなく、大目付にも気を配らなければならない。

■留守居役（るすいやく）…江戸城管理役

城主（將軍）の出陣中に城を守ることが職務であったが、太平の世では意義が薄れている。それでも相談役として將軍に信任が厚く、老中にも解任権はない。

特に権限はないが、解任されることもないので、出世競争の穴馬的存在である。

■側用人（そばようじん）…將軍補佐役

將軍付きの秘書のようなもので、権力闘争とは別格の存在。

あらゆる方面にそれなりの影響力を持つ。老中に解任されることはないが、將軍の代替わりとともにその任を解かれることになる。

■勘定奉行（かんじょうぶぎょう）…幕府財務担当

幕府の財政を握る重要職。場合によっては一氣に老中をねらえる地位である。

幕府直轄地の寄港権を持つため、商人とはもともと関わりが深い立場である。

■勘定吟味役（かんじょうぎんみやく）…勘定方監視役

次期勘定奉行候補。

勘定奉行の監視役であるため、両者は犬猿の仲である。特に権限はないが、勘定奉行を失脚させるには、勘定吟味役に力をつけることが重要になる。

■町奉行（まちぶぎょう）…警察署長及び裁判官

江戸のさまざまな犯罪を取り締まる存在。

裁判官も兼ねており、庶民の訴えに対して裁きをおこなう。判決は町奉行の独断で決まると言ってもよく、親しくして損はない存在である。

北の南の2つの町奉行があり、1ヶ月ごとに月番を交代する。

地位としてはそれほど高くなく、出世の足がかりとして作事奉行や寺社奉行を狙っている。

■作事奉行（さくじぶぎょう）…幕府普請担当

商業に關係する権限は特にないが、出世競争の出発点と言える役職。

■寺社奉行（じしゃぶぎょう）…幕府寺社管理役

寺社（寺や神社）の管理役。

賭場（博打場）は寺社の中で開かれる。寺社には町奉行の手が及ばないため、寺社奉行を押さえておけば、賭場は安泰ということになる。

作事奉行と並んで、出世競争の出発点でもある。

■火付盗賊改（ひつけとうぞくあらため）…盗賊監視役

その名の通り、放火犯や盗賊を専門に取り締まる役職。

地位は低く、町奉行への昇進を狙っている。

■小町

町で評判の美しい娘のこと。
出かけ先からの帰り道で出会うことがある。

■盗賊

江戸の夜を騒がす、商人の敵。
蔵に押し入られると、お金をごっそりと持っていかれることになる。強い用心棒を雇うことはもちろん、火付盗賊改への袖の下も忘れてはならない。
人から恨みを買っていると、盗賊の手引きをされることもある。

■やくざ

寺社で賭場を開いている。
また、ご禁制の品の買い取りもしている。買い取ってくれないようなときは、やくざとのつきあいが足りない。それなりに賭場に金を落としていくことも大切である。

■すり

出かけ先からの帰り道で出会うことがある。すりに出会うと、財布の金をすり取られてしまう。
腕のいい用心棒を連れていけば、すりを捕まえてくれることがある。

コラム——江戸よもやま話2

いつの時代も美しく——江戸女性の化粧作法。

江戸も中期以降になると、世の中は平和続きで、文化は爛熟期を迎える。女性の化粧も次第に濃くなり、白粉を厚く塗って、「笹紅」と呼ばれる青みを帯びた紅を差すのが流行った。ちなみに、將軍の奥方である御台所は、毎日三時間もかけて厚化粧を施したと伝えられている。

また、西洋から輸入された風習と思われがちなマニキュアも、実は元禄のころから存在した。「爪紅」といい、健康に見せるための婦女子のたしなみとされていた。ツマクレナイ（鳳仙花）やカタバミなどを原料とした紅粉を用いたが、あまり真っ赤なものは下品とされていたらしい（このあたり、現代の女性たちはどう思うだろうか）。

江戸後期になると、指輪をする風習が中国から渡ってきた。最初に取り入れたのは、やはり遊里の女性たち。吉原の勝山太夫がさまざまなファッションを流行させたように、彼女たちは、トレンドリーダー的な役割も果たしていた。

各種登場人物の役柄

■世話人

文化人や医者、大店（おおだな）の隠居など、江戸の各方面に顔の広い人物。世話人を雇うと、人の斡旋や紹介をしてもらえる。幕府重臣の人事異動があったときや、どこかで新たな産物が発見されたときなど、すぐに情報を仕入れて教えてくれる、たのもしき存在。世話人は必ず雇っておきたい。

■丁稚／手代／番頭

店の従業員。

一八歳以下のものは丁稚として、小遣い程度の手当で雇われる。一八をすぎると手代となり、一人前の従業員になる。手代から昇進して番頭になると、給金も高くなる。

従業員がいなければ、店の商品は売れていかない。店が大きくなれば、当然従業員も増やさなければならない。

■大番頭

従業員筆頭。店主の代理人的存在。

番頭の中から一人を大番頭にすることで、店の仕事のほとんどを任せることができる。

自分はほとんど店の経営を忘れても構わない。もちろん、それで店が繁盛するとは限らないので、大番頭に頼る部分と、自分でしっかり管理する部分の線引きは必要になる。

■用心棒

腕自慢の町人や僧侶、浪人など。

盗賊から蔵を守るために、ぜひ雇っておきたい。自分の護衛として連れ歩くこともできる。

中には口先だけの、自称「剣の達人」もいるので、いざというときに役に立つ人物をよく見極めておきたい。

■船頭

船の船長であり、産物の仕入れ担当でもある。

産物を安く、大量に仕入れられるかどうかは、船頭の力にかかっている部分が大きい。単なる船乗りと思ったら大間違いである。

■船大工

貿易船を造る大工。

蔵の増築や屋敷の修理まで、何でも引き受ける気っぷのいい男達。

■庭師

庭（庭園）を造る職人。

■同心／岡っ引

町奉行に属する江戸の警察官。日頃から市中見回りをしている。

突然の蔵改めに備えるためにも、袖の下は欠かせない。

■かわら版屋

江戸の大衆情報発信人。

かわら版は新聞と言うよりも、週刊誌のような内容といえる。

商売に関する重要な情報は世話人から聞き、江戸の町での出来事、よもやま話はかわら版から仕入れるという位置づけ。

■花魁

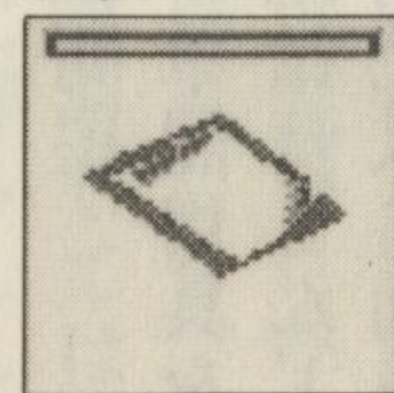
吉原遊郭の遊女。

大金をつぎ込んで、妾に囲ったり、身請けして正妻に迎えることもできる。

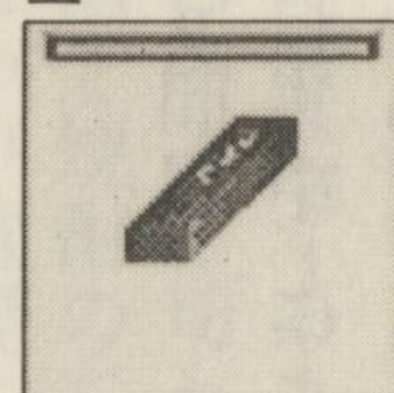
吉原の世界では、金の切れ目が縁の切れ目である。

● 取り扱い産物

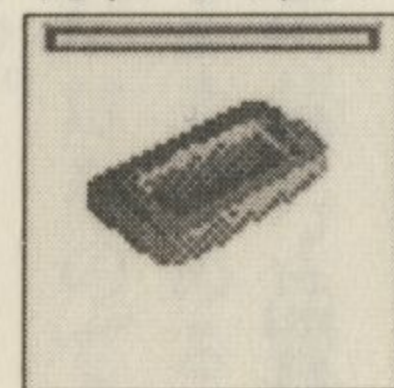
和紙



墨



硯(すずり)石



■ 材木問屋

建築材を扱う問屋。

火事と地震は江戸の華と言われるが、災害の後の町並みを再建するのに活躍するのは、大工と材木問屋である。まさに、江戸の花形的商売。満足な在庫を確保するには、多くの船と蔵が必要になり、取引も大金が動くため、どうしても行動は派手になりがちである。極端に北と南に産地が集中している。

● 取り扱い産物

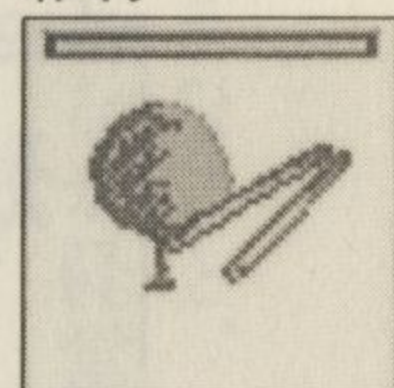
杉材



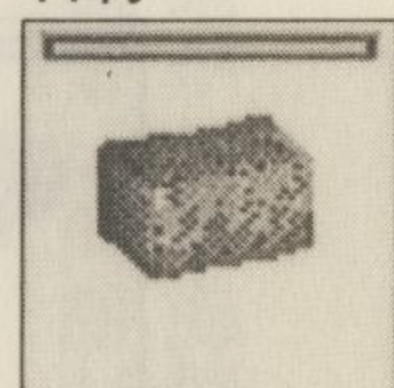
檜材



雑材



石材



■ ご禁制品

幕府に商いが禁じられている品。仕入れるには外国に抜け荷の船を出さなければならぬ。仕入れた後も当然店から売るわけにはいかず、やくざを捜して買い取ってもらう必要がある。蔵にあるのが見とがめられれば、奉行所に引っ立てられることになる。危険は多いが、それだけにかんりの大金が得られるかも知れない。

● 該当品目

阿片



ガラス器



洋酒



コラム——江戸よもやま話1

豪商対豪商——江戸あきんどの心意気。

江戸時代の豪商といえば、まっさきに思いつのが、「紀文」こと紀伊國屋文左衛門。その「紀文」と同時代の豪商に、奈良屋茂左衛門という江戸屈指の材木商がいた。この奈良屋、役人と組んで利権を漁り、巨万の富を築いた上に、深川の「目算御殿」という豪勢な屋敷で贅沢三昧を繰り返したという、まさに「悪徳商人」そのもののような人物。

奈良屋のあくどいやり方と高慢さが気に入らない紀伊國屋文左衛門は、奈良屋に一泡吹かせてやろうと、ある時、一計を案じた。吉原で雪見をしている奈良屋の座敷の前庭に、なんと小判をばらまいたのだ。当然、雪見の席にいた者たちが殺到し、醜い争奪戦を繰り広げる。こうして、せっかくの雪景色はだいなしになっ

てしまった。だが、奈良屋も、負けてはいない。数日後、「先日のお礼に」といって、ざるそばを二枚、紀伊國屋の座敷に届けさせた。もちろん、たかが二枚ばかりのそばでは、座敷の者すべてに行き渡るはずがない。紀伊國屋が追加のそばを注文しようとしたところ、吉原の廓内はもとより、近隣のそば屋はどこも、開店休業状態。奈良屋がすべて買い占めてしまった後で、紀伊國屋は大いに恥をかいたという。

意地の張り合いに、これだけのお金をかけられるのも、豪商であればこそ。現代とは、どうやら、スケールが違うようだ。

■酒問屋

酒を扱う問屋。

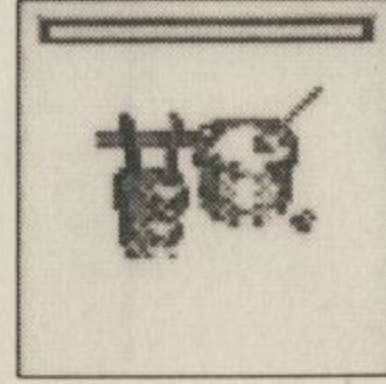
酒は完全に季節生産品であり、冬場に大量に生産し、1年分の在庫にする。もしも在庫が切れたら、次の冬まで切れたままである。

品目としては清酒と焼酎の二品だけなので、管理は比較的楽になる。少ない産地を、確実に押さえられるかが重要になる。

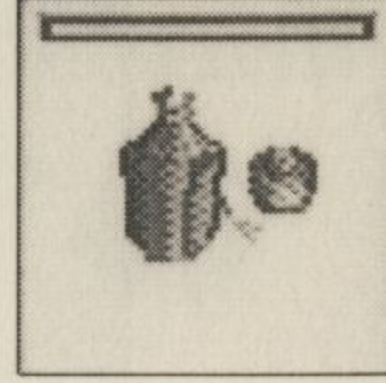
※当時は、貿易産物として成り立つほど酒を生産していたのは、ごく一部の地方に限られていた。

●取り扱い産物

清酒



焼酎



■呉服問屋

被服、繊維を扱う問屋。

品目によって生産時期がバラバラなこと、産地が日本海側に多く、江戸からは遠い行程になること、などがあって、なかなか経営の難しい問屋だが、問屋業の中では華やかな存在。

●取り扱い産物

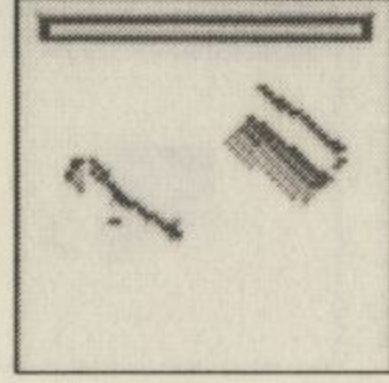
麻



木綿



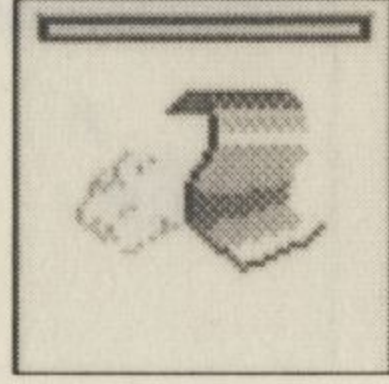
絹



ちりめん



紬(つむぎ)



■染物問屋

染料、塗料を扱う問屋。

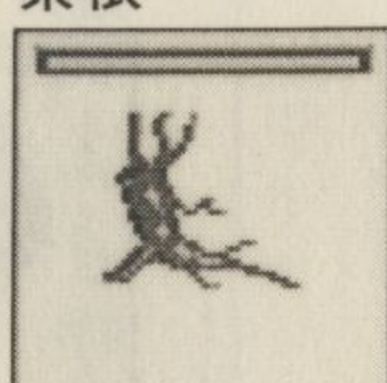
産地が非常に限られている上、どれも江戸から遠い地ばかり。大勝負として、抜け荷に挑戦するのも面白い。

●取り扱い産物

藍



紫根



紅花



漆



■薬問屋

薬を扱う問屋。

扱い品目は三品と少ないが、どれも大量入手が困難で価格も高い。どれも外国で仕入れることができるので、抜け荷にかけてみるのも一つの手。

●取り扱い産物

漢方薬



薬草



人参



■紙問屋

紙や筆記用具を扱う問屋。

産地はほとんど西に集中している。扱い品目も三品と少なく、商いに派手さが無い。堅実な販売人に向いている。

問屋とその取り扱い産物

■海産物問屋

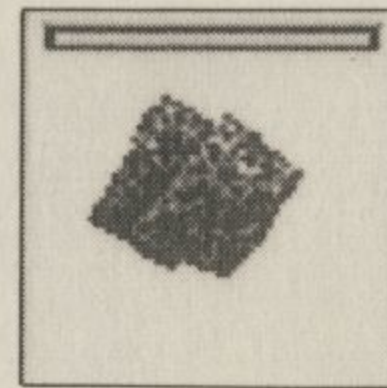
海、河で採れる食品を主に扱う問屋。
産地は全国津々浦々に広がるが、どちらかといえば北方に要所が多い。
生産が季節に影響される品目が多いことにも注意が必要。
※高速輸送の手段も、冷凍保存技術もなかった当時、海産物はすべて、乾燥や塩漬けなど、保存のきく状態に加工して輸送された。

●取り扱い産物

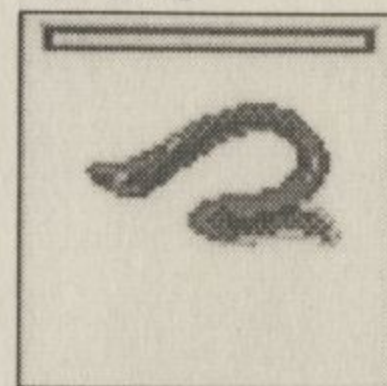
こんぶ



のり



うなぎ



干し貝



ひもの



するめ



塩鮭



鰹節



塩



■小問物問屋

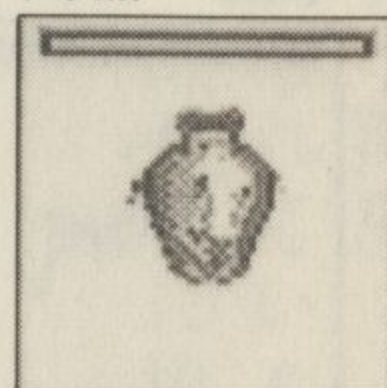
化粧品や嗜好品を扱う問屋。
単価が高く、大量仕入れ、大量販売には向かない品目を中心。
産地の少ない品目が多い。

●取り扱い産物

べっこう



陶器



白粉



煙草



香



■穀物問屋

主食品や調味料などの食品を扱う問屋。
比較的、江戸近辺に産地が集中している。

●取り扱い産物

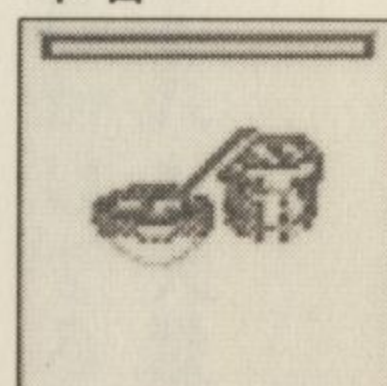
茶



そば粉



味噌



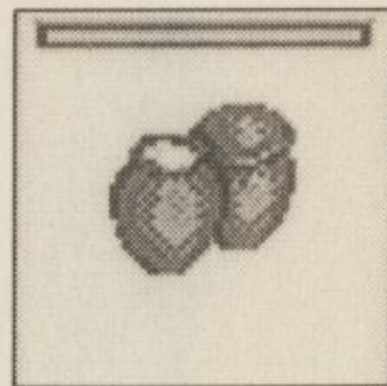
醤油



こんにゃく



酢



砂糖



■油問屋

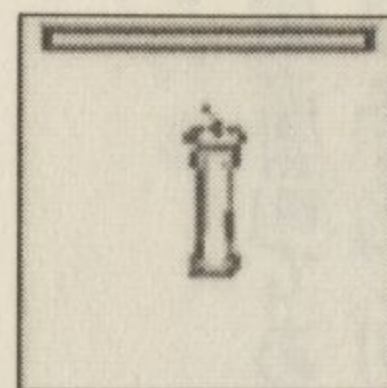
燃料関連を扱う問屋。
季節に影響されずに常に生産（産出）されるが、元々あまり大量に採れるものでもない。
産地は少数で、西に集中している。突然どこかの土地から産出される可能性があるため、
財政に余裕のある藩は鉱脈を掘り当てることに力を入れている。

●取り扱い産物

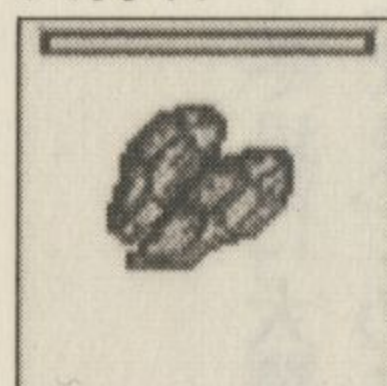
油



ろうそく



火打石



炭



石炭

